

三省堂 高校英語教育

2017年 夏号

巻頭エッセイ

なぜ漱石アンドロイドを作るのか 石黒 浩 …… 1

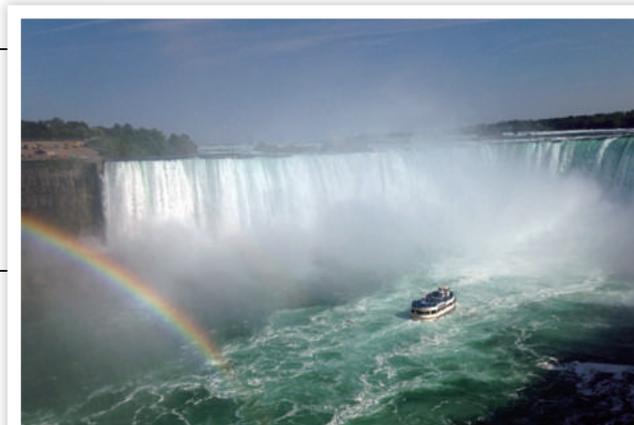


特集1 教科書(改訂版) Part 2

- 『CROWN English Communication II New Edition』 – Active Learningを視野に入れて– 霜崎 實 …… 2
- 『MY WAY English Communication II New Edition』 – 題材の改訂と新潮流の考え方– 森住 衛 …… 5
- 『VISTA English Communication II New Edition』 – 興味ある題材で言語活動を– 金子 朝子 …… 8
- 『CROWN English Expression II New Edition』 – 「ことばへの気づき」を表現力養成の起爆剤に– 松原 好次 …… 11
- 『MY WAY English Expression II New Edition』 – 教科書を使った Active Learningの方法– 飯田 毅 …… 14
- 『SELECT English Expression I New Edition』 – 更なるユーザーフレンドリーな教科書を目指して–(再掲) 井上 徹 …… 17
- 『SELECT English Conversation』 – 繰り返しが会話力をつける–(再掲) 北出 亮 …… 20

特集2 アクティブラーニング入門

- アクティブラーニングを使わないのはもったいないです 大淵 登志世・野口 茉莉 …… 23



2017年度センター試験の分析と対応 渡辺 聡 …… 28

カナダ便り 井上 徹 …… 表紙裏

表紙写真について 飯野 厚 …… 表紙裏

カナディアン・ロッキーの 大自然を巡る

成城大学 井上 徹

2015年9月、バンクーバーからカナディアン・ロッキーをめぐるバスツアーに参加した。ブリティッシュ・コロンビア州とアルバータ州にまたがるロッキー山脈は、カナディアン・ロッキーとして世界遺産に登録されており、2つの州には時差が1時間ある。アルバータ州側にはバンフ、ジャスパーといった人気の2大国立公園があり、ブリティッシュ・コロンビア州側にはヨーホー、クートニー国立公園やマウント・ロブソン州立公園など3つの州立公園がある。



初日はバンクーバーを出発して、北東へ640km移動。ガイドさんが気を利かせてくれて、予定とはちがうラックルジュンのキャンプ場でランチをとることに。ラックルジュン

は、「ライスカレー」（中井貴一主演で1986年にフジテレビ系列で放映されたドラマ）のロケ地。ドラマで使われたログハウスを見ながら静かな湖畔を歩いていると、登場人物たちの声が聞こえてきそうな感覚にとられる。この他、落差が75mもあるスパハッツ滝やサーモンの遡上がみられる穴場など、旅程に入っていない場所を訪れることができる。

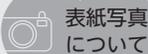
翌日は、カナディアン・ロッキーの最高峰、標高3,954mのロブソン山を間



近で見た後、アルバータ州に入り、ジャスパーのダウタウンを散策。その後、アイスフィールド・ハイウェイを南下。コロンビア大氷原センターで専用のシャトルバスに乗り、氷原手前のターミナルから雪上車に乗り換え、アサバスカ氷河の中央へ（写真）。氷河は地球温暖化の影響で溶けて毎年15mほど減少しているという。ガイドさんに、飲むと寿命が10年延びると言われて氷河の水を飲んで無邪気に喜んでいたら、少し複雑な気分になる。

3日目はバンフで市内観光をしたあと、筆者にとっての旅のハイライトであるレイク・ルイズとモレーン・レイク（写真）を訪れて感激はマックスに。白い雪とエメラルドグリーン湖のコントラストをしっかりとまぶたに焼きつける。最終日は、ヴァーノンの果樹園で美味しいアップルパイを食べて、オカナガン地方のワインルートを通って、バンクーバーに戻る。

4日間で走行距離2,143kmの旅をしたことを、後日カナダ人の友人に伝えると、「カナダ人ならロッキー・マウンテンの旅は2週間かけるのがツアー。旅行者が行かない山の頂上までハイキングするもの。」と言われて呆れられるが、カナダの雄大な自然に触れて、自分の悩みがいかにちっぽけなものか認識する良い機会になった。



表紙写真
について

カナダ、ナイアガラ地方の風物

法政大学 飯野 厚

ナイアガラの滝の高さは57mあります。その段差はNiagara Escarpmentと呼ばれています。アメリカ側ともつながっていますが、カナダではナイアガラ地方からオンタリオ州を北に700km以上、平坦な大地のアクセントとして自然美を生み出しています。Escarpmentに沿った一帯は、UNESCOによって生物圏保護区（Biosphere reserve）に指定されています。

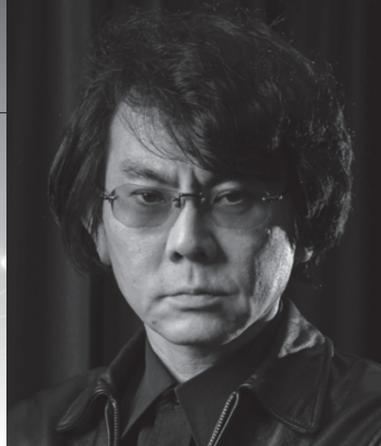
滝があるナイアガラ川は、アメリカとカナダの国境線です。東側がニューヨーク州、西側がカナダ・オンタリオ州です。米英戦争時（1812～15年）、カナダ戦線においてナイアガラ川一帯で多くの戦闘があったようです。For Erie、Fort Georgeなどは、アメリカとの激戦を経て、カナダが領土を維持した史跡として残されています。私が研究員として在籍しているBrock大学（公立）もSir Izack Brock少将に因んで命名され、51年前に開学しました。彼はイギリス軍の指揮官でこの地で戦死しましたが、アメリカ軍を駆逐した功績でカナダの歴史的英雄のひとりです。その後、カナダは1867年に英植民地を統合して（confederation）

独立し、今年150年を迎えます。カナダ人にとっては、このような国境をはさんで、アメリカ人とは異なるというアイデンティティを再確認する年となることでしょう。

ナイアガラの滝の上流にはエリー湖、下流はオンタリオ湖があり、約100mの高低差があります。私の住むSt Catharineは、この高低差に逆らって大型船を「登らせる」ためのWelland運河が名物となっています（写真上）。毎朝ジョギングで運河付近を走ると、大きな船がゆっくりと動く姿に出会います。船を眺めながら、長いセントローレンス川をはるばる上ってきたのかな、ClevelandやDetroitあたりまで行くのかな、などと道のりを想像し、五大湖地域の産業の息吹のようなものを感じます。このWelland運河ですが、地元では冬の到来と春の訪れを示す象徴でもあります。夏の間にたくさんの船を往来させ、1月～3月の間は管理作業のため水を最小限まで抜きます。冬はかなり寂しい情景ともなるのですが、4月になるとエメラルド色の水が注ぎ込まれ、再び満々と水をたたえます。寒いカナダの春の訪れを告げるナイアガラ地方独特の風景です。

なぜ漱石アンドロイドを作るのか

大阪大学教授・ATR 客員所長 石黒 浩



これまで多くのアンドロイド(人間に酷似した姿形、表情、動きを持つロボット)を開発してきたが、新たに、夏目漱石という偉人のアンドロイドを作る機会を得ることができた。この新たなチャレンジは、ロボット工学における意味以上に、文学研究的、社会的意味を持っている。

漱石アンドロイドに取り組む、最も重要な理由は、現時点において、夏目漱石とは誰も直接話したことがないという点である。

文豪夏目漱石が存在したことは日本では誰もが知っており、その作品の一つや二つは大抵の人が読んでいるのであるが、現在、夏目漱石と直接会って話したことのある人は、親族も含めて誰一人存在しない。このような過去の偉人のアンドロイドを製作することは、様々な意味を持つ。

まず、その漱石アンドロイドの制作そのものが文学研究に新たな研究方法を提供するという点である。文学研究とは、その作者の作品を通じて作者像を浮き彫りにすることである。作品を通して感じられる作者本人の性格やものの考え方に関する情報を集め、作者の人物像の再現を試みるのである。そうした文学研究に、作者のアンドロイドを用いることは、様々な研究者の意見をアンドロイドに収斂して、より精緻に作者の人物像を再現するという大きな意味を持つ。文学研究がアンドロイドを用いて新たな研究手段を持つことになるのである。

そして、そのように再現された夏目漱石の人物像を持つ漱石アンドロイドは、多くの人に影響を与え、夏目漱石の人格さえも持つようになる可能性がある。

そのための取り組みとして、日本全国の小、中、高校や公共施設において、主に子供達を対象に、夏目漱石作品の漱石アンドロイドによる読み聞かせを計画している。作者本人から直接読み聞かされれば、文学に対する興味を失いつつある現代の子供も、再び文学に興味を持つのではないかという期待である。

ただ、子供達が文学に興味を持つかどうかよりも、より重要なことは、夏目漱石の人格が、人々との関わりを通して、どのように漱石アンドロイドによって再現されていくか、または、新たに作られていくかということである。

読み聞かせというのは、漱石アンドロイドが夏目漱石らしく人々と関わるための手段である。無論、読み聞かせよりも、直接対話できる方がいいのであるが、対話機能の実現は容易ではないし、不完全な対話機能は間違った夏目漱石のイメージを再現することとなる。対話内容が限られているとしても、漱石アンドロイドの対話は、文学研究者が夏目漱石らしいと評価するものになっていなければならない。それ故、対話する漱石アンドロイドの実現はしばらく時間がかかる。

漱石アンドロイドが日本の各地で人々に読み聞かせを行えば、人々は漱石アンドロイドこそが夏目漱石だという印象を持つだろう。現在多くの人は、千円札に描かれていた夏目漱石を、夏目漱石のイメージとして持っている。漱石アンドロイドは、発話、表情、動作によって、そのイメージをさらに膨らませ、夏目漱石は漱石アンドロイドによって表現されると、人々に思わせるようになるかもしれない。そして、そうした漱石アンドロイドが夏目漱石本人に代わって、新たな影響を人々に与えるようになれば、漱石アンドロイドは夏目漱石の人格を持ち、現代の夏目漱石そのものになる。

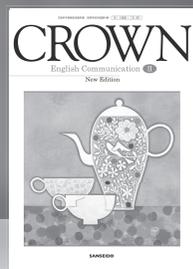
profile

1963年生まれ。滋賀県出身。大阪大学基礎工学研究科教授およびATR石黒浩特別研究室室長。主な著書に「アンドロイドは人間になれるか」(文春新書)、「ロボットとは何か」(講談社現代新書)、「アンドロイドを造る」(オーム社)等

『CROWN English Communication II New Edition』 — Active Learning を視野に入れて —

『CROWN』シリーズ代表著者

慶應大学名誉教授 霜崎 實



1. はじめに

2014年4月の使用開始以来、現場の先生方から多大なご支持を頂戴してきた現行版の『CROWN English Communication II』であるが、この度、さらに完成度の高い改訂版を刊行する運びとなった。現行版の良さを残しつつ、改善すべき点は大胆に修正を加えることで、より進化した教科書に生まれ変わることができたものと確信している。

本稿では、改訂のポイントを紹介すると同時に、今後の英語教育の機軸になると予想される「アクティブ・ラーニング」(Active Learning、以下AL)の観点から、教科書活用のヒントを提供したい。

2. 改訂の基本方針

最初に、今回の改訂の基本方針について確認しておきたい。第1のポイントは、<題材中心主義>を継承しつつ、本課レッスンの題材の部分的な差し替えを行ったことである。具体的には、本課10レッスンのうち3レッスン、およびOptional Lessonの差し替えを行った。さらに、各課に配置したOptional Reading 10編のうち、5編の差し替えを行った。都合、14編が今回新しく導入されたことになる。

第2に、生徒の発信力強化を目指して、コミュニケーション能力を育む活動を行う場として、Your Reactionというセクションを設けた。本課の内容を単に受動的に受け入れるだけでは、思考力・発信力の養成を目指す英語教育の目的を果たすことはできない。「君はどう考えるのか?」という観点から、生徒自身が自分の考えを構築する場を提供する必要がある。Your Reactionが、まさにそうした必要性に応える場となることを期待している。

第3に、「質量面での格段の充実」を実現したことである。「教科書を教える」という考え方から「教科

書で教える」という教科書観に基づき、現場のニーズにしたがって題材の選択が可能になるような内容を盛り込んだ。特に本課と対になるOptional Readingは、そうした要望に十分に答える内容になっていると考える。

3. 多様性に富んだ題材

『CROWN English Communication』では、生徒の思考力や知的好奇心に訴えるような題材を厳選し提供することを重要視している。今回、本課で取り上げたテーマは、言語・科学・冒険・生き方・伝統文化・国際協力・医療・歴史・環境・平和・社会貢献など多岐にわたっており、生徒の視野を広げるための題材が豊富に提供されている。以下、各レッスンで取り上げたテーマとその概要を示す(次頁を参照)。

本課は合計10レッスンから構成されている。そのうち★印を付した3レッスンが今回新たに導入したもので、その他の7レッスンは現行版からの継続とした。ただし、☆印を付したL. 9 “The Long Voyage Home” は、部分的修正を加え、内容を時代に即したものにした。Optional Lesson (選択教材)については、“Err in the Direction of Kindness” を新たに導入した。もともとはアメリカの大学の卒業式でのスピーチであるが、日本の高校生にとっても、豊かな人生経験を持つ作家のこぼれに耳を傾け、人生にとって何が大切なのかを学ぶ意味は大きい。

4. Active Learning の視点とレッスン構成

今後の英語教育の改善に向けて、「学び」へのアプローチの本格的な軌道修正が提唱されている。ここで、ALをもとに教育実践を行うに際して、その基本的な考え方を整理しておこう。ALにとって重要なのは、「学び」に対する考え方である。学びは、教師から生徒へと一方向的な知識の伝授という形で行われ



『CROWN English Communication II New Edition』の題材：テーマと概要

★新題材
☆部分改訂

レッスン	タイトル	テーマと概要
Lesson 1 ★	Around the World on a Bike	[冒険・生き方] 劇作家として活躍する平田オリザ氏の若き日の冒険旅行を扱う。
Lesson 2	Into Unknown Territory	[伝統文化・生き方] 将棋界の第一人者である羽生善治氏の将棋への取り組みから、経験や直観などに対する考え方を学ぶ。
Lesson 3 ★	OOPARTS	[探求・科学・歴史] ナスカの地上絵のように、今日でも科学的に解明されていない謎について取り上げる。
Lesson 4	Crossing the Border	[国際協力・医療] 日本人医師として初めて国境なき医師団に参加した貴戸朋子氏が、医療援助の現場での経験を語る。
Lesson 5 ★	Saving Cherokee	[言語・民族] アメリカ先住民の言語、チェロキー語の歴史と復権運動を取り上げることで、母語の大切さについて学ぶ。
Reading 1	Sun-Powered Car	ユーモア短編を英語で読む。
Lesson 6	Ashura—A Statue with Three Faces	[伝統文化・歴史・芸術] 興福寺の阿修羅像を取り上げ、それを取り巻く歴史・工法・表情の謎について考える。
Lesson 7	Why Biomimicry?	[発明・環境・共生] 自然の中に最先端テクノロジー開発のヒントが隠されている。科学技術と自然との共生がテーマ。
Lesson 8	Working against the Clock	[平和・社会貢献] 地雷除去のための国際協力活動を紹介しつつ、平和の問題について考える。
Lesson 9 ☆	The Long Voyage Home	[自然科学・宇宙] 小惑星探査機「はやぶさ」が困難に満ちた宇宙の旅を経て、いかにミッションを達成したのかを紹介する。
Lesson 10	Grandfather's Letters	[手紙・家族・歴史] 祖父から孫たちに送られた1,200通もの絵手紙の発見。手紙による家族の交流と絆について考える。
Reading 2	A Fall Before Rising	[冒険・生き方] ヒマラヤ登山で九死に一生を得た主人公の体験とその後の生き方について学ぶ。
Optional Lesson ★	Err in the Direction of Kindness	[スピーチ] アメリカの作家、ジョージ・サンダース氏のスピーチから、「他人への優しさ」について考える。

るのではなく、学びの主体である生徒が自ら積極的に学びの活動に関わることで、より深い学びが実現する。表面的な知識の習得ではなく、生徒自身にとって意味のある学びを実現するためには、受動的な学びではなく、能動的な学びが必要となる、ということである。そのためには、生徒の価値観・経験・視点などをもとに、意見交換の場(たとえば、ディスカッション)を設ける必要がある。しかし、単に話し合いの時間を設けるだけでは不十分である。有意義な学びのためには、資料を読んだり、リサーチを行ったり、論点や自分の考えを整理して書いたり、といった活動が前提となる。また、ALを通じて、生徒が一人では取り組めないような、問題発見や問題解決といった、挑戦的なレベルでの学習活動が行われることも大切である。このような考え方を念頭に、以下、レッスン構成を紹介しつつ、AL活動の提案を行っていきたい。

4.1 Pre-reading 活動

タイトルページでは、本文のテーマを端的に表現したエピグラムを用意した。レッスンに入る前、あるいは本文の学習を一通り終えた段階で、エピグラムの意味や本文内容との関連性について生徒にディスカッションさせてみるとよい。(以下、AL活動が

有効だと思われるところには、[⇒AL]と表示する。)

Take a Moment to Thinkでは、本課の内容に関連した英問を提示した。生徒の背景知識を活性化させることを目的としたものであるから、本課への導入として活用していただきたい。ここでも、小グループでのディスカッション[⇒AL]の形をとることもできる。

4.2 Reading 活動

本文は4セクションから構成され、原則として見開き2ページである(ただし、§1の本文は1ページ構成)。本文の理解を助けるために、傍注で慣用表現とそのパラフレーズを英語で提示し、脚注では必要に応じて例文を提示した。

また、セクションごとに、本文の内容理解を確認するための英語の設問ならびにリスニング問題(TF問題)を用意した。

4.3 Post-reading 活動

(1) Comprehension

ComprehensionのCheckでは、多肢選択問題を用意した。作成にあたっては、瑣末な問題を排し、内容の骨子や重要な情報を問う設問に絞った。本課の学習を終えてからの確認として利用してもいいし、

予習用として活用することもできる。

Summaryは、本文の全体像を俯瞰する力を養うことを目的としている。そのためには、はじめに生徒個人に要約のドラフトを書かせ、それをもとにグループ・ディスカッション[⇒AL]を通じて、協同で要約を作らせるのもよい。教科書の穴埋め式の要約問題は、AL活動が終了してから、要約のサンプルとして検討してもよい。

Food for Thoughtは、生徒が情報を取り出し、解釈し、自らの体験等を踏まえて英文内容の理解を深めることを目的としている。この活動は日本語で行うことを想定しているが、AL活動によって、より深い学びに導きたい。

(2) Your Reaction

このセクションは、本課の内容を踏まえて自分の考えを構築することを目的としている。4つのステップから構成されているが、ぜひAL方式で活用してみたい。

まず、Agree or Disagreeでは、本課のテーマについて、ある意見が提示される。次に、Agree、Disagree、Cannot decideの中から、自分の立場に近いものを選択し、その理由を英語で書いてみる。

次に、Let's listen to the dialogでは、MeiとJerryのダイアログを聴いて、リスニングによる内容理解を試みる。巻末に掲載したスクリプトは伏せて、まずリスニングから入りたい。次に、スクリプトを確認し、内容の理解を確かめる。授業では、意見表明の仕方や反論の仕方にも注意を喚起したい。

Let's write about itでは、ダイアログを踏まえて、自分の意見を英文でまとめる。その際、教科書のサンプルが参考になる。時間的な余裕があれば、グループ・ディスカッション[⇒AL]を行うことも考えられる。それぞれが自分の立場表明をしつつ、他のメンバーからの質問や反論に答えることで、英語での生きたコミュニケーション活動を体験することができるだろう。

Anything more to say?では、自分の好きな設問について、短いエッセイを書かせる宿題として活用することもできる。また、生徒の関心とレベルを考慮しつつ、ディスカッション[⇒AL]のテーマとして活用することも可能だろう。

(3) Grammar

Grammarでは、重要な文法項目を取り上げ、解説と例文を提示した。〈文法コラム〉では、生徒から

の疑問を想定して解説を施した。文法を単なる暗記の対象とするのではなく、理解して納得することが大切であるという考えに基づいたものである。さらに、学んだ文法項目を活用して、生徒が自分の体験や考えを述べる「自由英作文」の課題も用意したので、こちらはAL活動に活用していただきたい。

(4) Exercises

Exercisesでは、Grammarで学んだ文法項目の理解を確認し、表現活動に結びつけるための練習問題を用意した。穴埋め形式、語形変換、部分作文問題、整序問題などさまざまなタイプの問題に取り組むことで、文法理解を確かなものにしていただきたい。

(5) Optional Reading

Optional Readingでは、本文のテーマに関連した内容を扱った英文を取り上げた。脚注を参照すれば、辞書の助けがなくても通読することができるはずである。ただし、Optional Readingは発展的な学習内容を含むので、自学自習用の教材として活用することもできる。

なお、巻末のToolboxでは、レッスンごとに「本課の関連語彙」、「Your Reactionで使える語彙・表現」、「Grammarの自由英作文で使える語彙」を提示したので、AL活動などの際に利用していただきたい。また、機能表現 (Functional Expressions) も適宜活用していただきたい。

5. おわりに

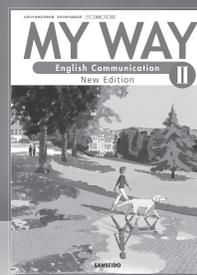
以上、『CROWN English Communication II New Edition』の編集方針、教材内容、レッスン構成などについて述べてきた。さらに、英語教育において「深い学び」を実現するために、説明の随所にAL活動の提案を行ってきた。もちろん、すべての提案箇所でAL活動を導入すべきだという主張をしているわけではない。授業時間の制約や生徒のレベルや関心を考慮しつつ、それぞれの現場にあった取捨選択を行った上で実践を試みていただきたい、ということである。すでにALを取り入れた授業を実践しているしゃる先生方も少なくないと思うが、現場からのALの実践報告をお寄せいただければ幸いである。

英語授業の活性化と知識の内化、そしてバランスのとれたコミュニケーション能力の育成のために、改訂版教科書が少しでも役に立つならば、編集委員会にとってこれにまさる喜びはない。

『MY WAY English Communication II New Edition』 — 題材の改訂と新潮流の考え方 —

『MY WAY』シリーズ代表著者

関西外国語大学客員教授 **森住 衛**



1. はじめに — 教科書の分析の論点と視点

現行版の『MY WAY English Communication II』(以下、『II』)を紹介したのが、2013年の春でした。あれから4年を経ましたが、この期間を前後して、文科省から日本の高校英語教育界が影響を受ける大きな提案や方針の開示がありました。たとえば、大学入試への外部試験の導入、英語の授業は原則として英語、CEFRのCan Do Listの導入、そしてアクティブ・ラーニングなどです。これらはいわば不易流行の「流行」で、教科書作成においては、当然、考えなければいけません。『不易』の部分もおろそかにできません。不易の最たるものは、およそあらゆる教育が担っている人格形成や恒久平和の目的です。外国語教育に限っていえば、この目的を支える異文化理解関係の題材や言語材料や言語活動の基本を生徒に保障することです。本稿は、このような立脚点のもとに、①『MY WAY コミュニケーション英語シリーズ』の特長、②題材を中心とする『改訂版II』の内容、そして、③「アクティブ・ラーニング」への対処、の3点を取り上げます。この3点とも不易流行の両面がありますが、相対的には、①は不易、②は不易と流行、③は流行という位置づけで取り上げます。

2. 『MY WAY コミュニケーション英語シリーズ』の特長

教科書を分析したり、評価したりする場合は、しばしば、題材内容、言語材料、言語活動、教科書構成の4点に言及されます。これらについては、不易流行の2つの視点とともに、本誌2016年夏号で『I』の改訂版を説明したときに取り上げました。ただ、『II』(改訂版)からMY WAYシリーズを初めて使う先生方もいますので、本稿でも略述しておきます。

1) 題材：多様さと深さ

教科書の核になるのは本文の題材内容です。この

題材内容に高校生に訴えるメッセージ性がない教科書は、「魂」がないのも同然です。そのために、『MY WAY シリーズ』は題材には力を注いできました。また、本課の他にも<Optional Reading>を設け、各課ごとに関連する話題を取り上げているので、題材の深化も目指しています。この詳しいことは、次の「題材を中心とする『II』の改訂の特長」で取り上げます。

2) 言語材料：語彙と文法の強化

古今東西言われてきているように、「語学はやはり語彙と文法」です。この2つがしっかりと身につけていれば、実践的コミュニケーションにも大学受験にも役立ちます。しばしば日本人が英語をしゃべれないとか、大学新入生のレベルが落ちたとか言われていますが、原因はこの語彙と文法指導の貧困にあるのです。語彙はその分量が不足しています。これが次の学習指導要領でようやく少しは解消されようとしています。文法は極言すれば「脇に追いやられて早30年」です。特に、コミュニケーションとセットにされているために、認知的な理解が衰退してきています。『MY WAY』(改訂版)はこの語彙力と文法力の増強のために、説明や練習を質量ともに増やして強化しました。特に、『MY WAY』の独自性という点では、文法の説明の内容です。まず、教科書本文から該当する文を取り上げています。次に、文法説明を図式風に解説しています。そして、最後にキャラクターに一言で語らせ、これを吹き出しにしています。

3) 言語活動：ReadingとThinking主導

言語活動は一般にListening・Speaking・Reading・Writingの4技能を指しますが、これにThinkingを加えて5技能と考えるべきでしょう。このThinkingは4技能の中核にある技能で、それぞれの技能と結び付いています。『I』および『II』の教科書はいわ

ゆる総合教材ですので、このいずれをも扱っています
が、『MY WAY』ではその中心を Reading & Thinking
に置くことを不易としています。これは以下の理由
からです。

- ① Reading は他の技能の基礎になる。
- ② TEFL では Reading が最も効率が良い。
- ③ Thinking を促すには Reading が最適。
- ④ 他の3技能は英語の他の科目でも扱える。

4) 教科書構成：斬新で使いやすい

教科書構成とは、教科書にどのような内容をどの
ような順序で盛り込んでいるか、レイアウトはどの
ようになっているかなど、教科書の体裁です。『Ⅱ』（改
訂版）は具体的には、以下のようになっています。

(1) 教科書の全体の流れ

- 表見返し：Take your time and enjoy the journey.
- 目次
- 本書の使い方：本文ページ、課末ページ
- 各課 (cf. 「(2) 各課の構成」)
- 文法のまとめ、Sounds、Vocabulary Building、
Activity Corner 各①～④：2課ごとの配置
- Reading 1, 2：4課と10課のあと
- 付録：文法・文型例文集、Word List・Idiom List
- 裏見返し：Someday in this town ...

(2) 各課の構成

- タイトルページ：Before You Read
- 本課本文 (左ページ) とセクションごとの活動 (右
ページ)
- 課末の総合練習問題
- Optional Reading と Q&A

この構成は、全体としてはどの教科書も「似たり
寄ったり」かもしれませんが。あえて、『MY WAY I・
II』（改訂版）を他者の教科書との差別化で言うと、
各課の後に Optional Reading を設けていること、課
末の総合練習問題に <考えてみよう> を入れている
ことで、教科書構成でも題材や Reading を深めてい
ることです。

3. 題材を中心とした『Ⅱ』（改訂版）の特長

言言語材料や言語活動を取り上げる形式は『Ⅰ』（改
訂版）と同じで、項目が若干異なるだけなのでここ
では省略して、最も改訂が多い題材について取り上げま
す。以下が『Ⅱ』（改訂版）の本課および <Optional
Reading> (以下、OP) の一覧です。

L1. Pictograms [絵文字・ことば・世界] 世界のピクトグラムいろいろ OP: Coats of Arms [紋の伝統・英国・日本] 英国の紋章と日本の家紋の比較
L2. A New Way to Clean up the Ocean [若者・環境] 海のゴミを清掃する若者のアイデア OP: Waste Banks [再生利用・環境・東南アジア] インドネシアの「ゴミ銀行」の仕組み
L3. Cuba [教育・医療・相互扶助・中米] カリブ海のキューバの社会と文化 OP: "Go" in Cuba [ゲーム・グローバル化] キューバで人気の高いゲーム：碁
L4. The World's Poorest President [幸福・人生・政治] ウルグアイの「世界で最も貧しい大統領」 OP: The Uruguayan National Drink [比較文化・茶] ウルグアイの国民的飲料の Mate 茶
Reading 1 The Open Window [サキの珠玉の短編] 病気静養のために田舎の知人宅に滞在する青年は、開放け しにされたフランス風戸口にまつわる話に驚かされるが…
L5. Eye Contact [コミュニケーション・障がい者] デフリンピックのサッカーの日本チーム OP: Blind Soccer [スポーツ・共生] ブラインドサッカーで大切なもの
L6. Space Elevator [科学・宇宙] 本当にエレベーターで宇宙に行けるのか OP: Hayabusa 2 [科学技術・日本] 小惑星探査機「はやぶさ2」の挑戦とは
L7. An Encouraging Song [若者・音楽・震災] 坂井泉水『負けないで』の勇気と希望 OP: Heal the World [ポップス・歌詞] マイケル・ジャクソンが残したメッセージ
L8. Language Contacts [言語接触・混合言語文化] 小笠原の独特な環境と言語文化 OP: A Pidgin English [ピジン英語・Englishes] ハワイの現地語と英語の混合語: ピジン英語
L9. Charles Chaplin [人物伝・青春・苦悩] チャップリンの喜劇の裏に青春時代の苦悩 OP: A Speech from The Great Dictator [英語・演説] 映画『独裁者』の最終場面の名演説
L10. The Five-story Pagoda of Horyuji [日本・建築] なぜ五重塔は倒れないのか OP: Pyramid—A Stone Structure [建築・エジプト] 4,000年の歴史のピラミッド
Reading 2 A Letter to Italy [映画・若者] ある日、イタリアのロゼッタにオーストラリアから届 いた一通の手紙。これが4人の若者の運命を変える。

今回の『Ⅱ』（改訂版）で、題材を新しくしたのは
第2課から第4課までの3つの本課とOP（計6つ）、
そして Reading 1つ（網掛けの部分）です。『Ⅱ』（改
訂版）の本体は、全体が10課と10のOP、そして2
つの読み物ですので、半分近くを変えたことになり
ます。変えた理由は、高校生にいわば流行の話題を
届けたいからです。

Reading 1を除けば、いずれもこの3～4年に出て
きた話題です。この「流行」に対して『MY WAY』
が題材における「不易」と考えていることに、外国



語教育をはじめとする言語教育の題材は言語についての話題を取り上げるべきという理念があります。このため、今回の改訂でも、ことばに関する題材は残しました。第1課、5課、7課、8課です。この他、多少ともスピーチなど言語コミュニケーションに関係する話題は、第4課、第9課です。つまり、半分近くが言語に関する話題と言っても過言ではありません。

4. 英語教育の最近の潮流への対応

いつの時代でも、どのような分野でも、「流行」があります。これは、その時代に合うという点では重要ですが、それに文字通り「流されない」ようにしなければいけません。この立脚点のもとに、最近の4~5年で浮上してきた英語教育における「流行」とこれに対処する教科書のあり方について述べておきます。一言でいうと、「適宜にできる範囲で対応する」となります。

まず、大学入試へのTOEFLなどの外部テストの導入の問題ですが、これには是非論があります。仮に、参考程度に導入された場合でも、教科書作成には直接関係しません。センター試験などを教科書で多少とも意識して取り上げるのは「コミュニケーション英語Ⅲ」です。

次に、「英語の授業は原則として英語で」の問題です。この方針に沿って教科書の指示文などをすべて英語で書く教科書なども出ていますが、『MY WAY』ではそこまでの対応はしていません。しかし、英語の授業ですので、英語で進めた方が望ましい部分があります。たとえば、挨拶や問題の指示、口頭導入や口頭まとめ、教室英語などです。逆に「英語で」が望ましくない場合があります。それは、文構造[文法]の説明やことばの大切さ、面白さ、不思議さ、怖さなどの説明のときです。また、題材内容の深い読みやCritical Readingの解説をするときです。なお、「教師用指導書」では『英語で授業編』を用意してあります。それぞれの学校や生徒の実情のTPOに応じて活用してください。

最後に、「アクティブ・ラーニング」です。この指導法が最初に打ち出されたのは、2012年の中教審の答申の「用語集」で、以下のように説明されていました。

教員による一方向的な講義形式の教育とは異なり、学修者の能動的な学修への参加を取り入れた教授・学習法の総称。学修者が能動的な学修への参加を取り入れることによって、認知的、倫理的、社会的能力、教養、知識、経験を含めた汎用的能力の育成を図る。発見学習、問題

解決学習、体験学習、調査学習などが含まれるが、教室内でのグループ・ディスカッション、ディベート、グループワークなども有効なアクティブ・ラーニングである。

文科省は、最近ではこれを「主体的・対話的な深い学び」という言い方に変えています。このこと自体はよいことで、英語教育において賛同できる点もあります。ただ、あまり頑張らない方がよいと思います。その理由は、以下の5つの点で疑問点や危うさがあると思われるからです。第1点は、この指導法は1990年代に欧米の高等教育を中心に普及したものです。日本では中教審の大学部会が2012年の答申で取り上げました。これを中・高に当てはめるには無理があります。第2点は、高校段階でも、英語など外国語の活動としては、内容が「高度」過ぎます。上記の定義や解説を実現するには、母語の国語教育でもむずかしいでしょう。第3点は、第2点を受けた議論になりますが、外国語教育では、これ以前にしなければいけないことが多々あります。言語材料に関する基本的な知識、5技能(thinkingを含む)の基本的な技能の定着です。第4点は、この指導法を採用するには予習や復習の時間を十分にとらないといけません。上記の定義で「学修」という用語を使っているのは、学校の授業に加えて、「自宅学習」にその2倍の時間をとるといいうわば単位制(大学)に基づいているからです。第5点は、この種の指導法は部分的にみれば今に始まったことではありません。共同学習、発展学習、調査学習、ディスカッション、ディベートなどは昔からありました。最近では観点別評価やCan Do Listなどもこの例に入ります。

5. おわりに — バランスの大切さ

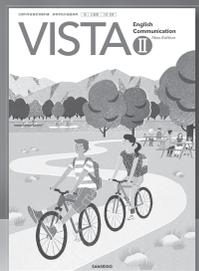
以上、「MY WAYコミュニケーション英語シリーズの特長」「題材を中心とした『Ⅱ』(改訂版)の特長」、そして「英語教育の最近の潮流への対応」について述べてきましたが、この3つに共通することはバランスをとるといことです。特に、「流行」が入って来た場合には、その方向に流されないように注意が必要です。よい部分は吸収して、過度には傾かないことです。これは、教科書の編集についても言えます。一言で表しますと、知識、技能、観点の3つのバランス、不易(教養)と流行(実用)のバランスがとれているかです。『Ⅱ』(改訂版)はこのように思いで編集した教科書です。

『VISTA English Communication II New Edition』

アクティブ・ラーニングを見据えて
—興味ある題材で言語活動を—

『VISTA』シリーズ代表著者

昭和女子大学 金子 朝子



1. はじめに

『コミュニケーション英語II』の改訂版『VISTA I』に続いて、改訂版『VISTA II』を多くの先生方にご覧いただける運びとなり、大変嬉しく思います。

『VISTA』シリーズは、繰り返し学ぶことで、英語の基礎・基本をしっかり定着させることを第一の目的とした教科書です。『VISTA II』もこれを最重点として、『II』ではさらに、『I』で学んだ事項も含めて、それまでに学んだ知識を「聞く」「話す」「読む」「書く」の4技能を用いたコミュニケーションの様々な場面で用いる練習を通して、英語を学ぶことへの動機を高め、英語の運用力を高めることを目指しています。

時代や地域を越えた多彩な題材を揃え、学びやすく教えやすい教科書として、多様なレベルの英語力を持つ生徒の指導に対応できるように工夫しました。

2. 『VISTA II』の編集方針

小学校の英語活動と中学校の外国語(英語)指導を経た、高等学校の外国語(英語)は、これからの日本を支える若者たちが、世界の言語やその背景にある文化を尊重し、主体的に外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする態度を育成するための指導の最終段階にあります。「コミュニケーション英語II」では、社会で活用できる英語を身につけることが求められています。

もちろん基礎となる知識が不十分では、その活用は望めませんが、基礎固めと同時にそれを活用するスキルも身に付けなければなりません。しかし、現場では、高校生の英語の学習意欲に課題を感じている教員も少なからずあるのではないのでしょうか。そこで、『VISTA II』では、文脈から取り出した例文のみで英語の仕組みを学ぶのではなく、様々な題材内容を理解することを通して、日本語とは違う英語のルールに気づいてもらうことができるよう、英語に

触れることが楽しいと思ってもらえる教科書作りを大切にしています。

4技能を組み合わせたり、統合したりした言語活動をバランスよく配置し、生徒たちが、違う文脈で同じ表現や構文を繰り返し用いる機会を作るよう工夫しました。教科書の各課の構成は『VISTA I』と同様に、まず1ページ大の写真を見ながら行う導入用listeningセクションのWARM UP!があります。紙面上の簡単な質問に答えたと後に、英語の短い解説を聞いて答えを確認します。本文はセクションごとに1ページにまとめました。内容を理解する補助として本文には、日本語によるReading Pointを示しました。また、本文中、新出文法の箇所にはマークが付され、各課の最後には文法解説STUDY IT!があります。テキストの音読CDは、もちろんlisteningやwritingに活用できます。また、内容についての簡単なQ & A!はspeakingとwritingの補助として、さらに、各セクションのページの下にある、本文からアクセントやイントネーションなどに留意したい部分を取り出した練習SAY IT!は、発音や音読指導の補助となります。

題材内容に興味を持ち、レベルに応じた練習を繰り返すことで、基本を学んだうえで、応用問題も含まれた課末の練習であるPRACTICE!にチャレンジし、成功体験を積むことで、自然に英語への抵抗感が興味へと変わっていくことを期待しています。

3. 改訂版のポイント

1) 生徒が興味を持つ話題を掘り下げて読む

『VISTA』では、話題性のある題材が豊富に扱われています。現行版『VISTA II』の、アイルランドの魅力、ノーベル賞のエピソード、ツタンカーメンの墓に残された花、ガラパゴス諸島の現状、日本の伝統文化、書道の新しいスタイル、水族館の今と昔、



日本とトルコの友好関係の歴史の話題に加えて、改訂版では、アメリカ、デンマーク、ベトナムの誕生日の祝い方、サグラダ・ファミリアの特色、テニスの錦織選手の活躍の秘訣を題材としています。また、ENJOY READING! では落語の「まんじゅうこわい」をドラマ仕立てにしました。

自分とは違う視点からとらえた発見、世界のさまざまな文化や歴史など、単に話題を紹介するだけに留まらず、内容理解のTHINK! では、PISA型読解力による本文の読み取り方にも挑戦します。ここでは、話者や書き手が伝えたいことは何かを捉える、自分の知っていることと関連づける、「もし～なら」と仮説を立てて予測するなど、内容をより深く掘り下げて考えます。

2) 文法の基本を徹底する

往々にして、文法事項は一つの課で一度扱われるだけで、復習の機会がないことになりがちです。『VISTA』では、必ず前課で扱った文法事項は、次の課でも本文で用いて定着を図る機会を作っています。

< Part 1 > では疑問詞やifで始まる節、比較の表現、名詞を修飾する分詞、知覚動詞、tell ~ to do、使役動詞、関係代名詞whatを、< Part 2 > ではhow to do、It seems that ~、現在完了進行形、形式目的語it、部分否定、can be done、関係代名詞の非制限用法、have been done、過去完了形、強調構文を扱います。「コミュニケーション英語I」が学習指導要領で共通必修科目に設定されているため、高校で学ぶべき文法事項は『VISTA I』に全て含まれています。『VISTA II』では、それらを復習しながら、表現や構文で特に留意したいものを学びます。

『VISTA』は基礎・基本を固めることを第一の目標としていますので、各課末のSTUDY IT! では、ことばの基本的な規則を学ぶため、できるだけ基本に絞った確認をします。ご指導の先生方には、こうした活動の中から適宜必要なものを選択してご活用いただきたいと思います。STUDY IT! の狙いは、生徒に「できた」「わかった」という成功感を持ってもらうことです。また、学んだ文法の最重要ポイントをいくつかまとめて確認できるように、文法のまとめのコーナーのLook and Learnも数課おきにありますので、繰り返しの確認に利用していただきたいと思います。

3) 言語活動を通して深い学びへ

課末のPRACTICE! には、その課で学習する文法事項を中心とした言語活動があります。

はじめのlisteningは、ターゲットの文法事項が用いられている簡単な英文を聞きながら解答します。また、教科書の巻末には音声スクリプトも掲載されていますので、readingに加えてspeakingやwritingの産出活動にもぜひご活用ください。続く問題も、その課の文法が焦点です。問題の指示は、例えば「対話してみよう」とか「書いてみよう」などがありますが、生徒のレベルや必要性に合わせて指示以外のスキルの練習にも使っていただくと、より学習の定着を図ることができます。単に記憶したり、理解したり、記述したりするなどの浅い学びに留まらず、話のやり取りのつじつまを合わせたり、自分の立場を説明したり、相手に理解してもらえるように解説したりする深い学びの機会も組み込まれています。

その他、USE ENGLISH! のコーナーでは、ほめる、主張する、などの言語の機能に注目して、speakingやwritingの産出活動の練習を行います。ここでは、自分の気持ちや考えを伝えるために、それぞれの言語の機能を達成するための慣用表現を使えるようにすることを目的としています。ENJOY COMMUNICATION! では、例えば、海外旅行での入国審査、道案内、病院などの場面別によく用いられる会話の慣用表現を中心に練習します。授業の導入時や授業時間に余裕がある時などにも、短い時間で行えるコミュニケーションの練習です。Reading Skillは、意味を読み取るためのコツをまとめたセクションです。単語を拾い読みして必要とされる情報を見つけ出したり、代名詞が指す内容を確認したり、パラグラフの構成に注目したりして、まとまった文章が伝える内容を適切にとらえるコツを学びます。

4) 語彙力をつける

文型・文法を確実に身に付けるために、より多くの例文が欲しいと思われる先生方も多いでしょう。それに応えて、『VISTA II』では「活用例文集」を巻末に掲載しました。本文では使っていない新出単語も入っていますので、語彙を増やすことにもつながります。

語彙に興味を持ってもらうためのもう一つの工夫として、『VISTA II』でも各課のセクションごとに、

一語を取り出して、その語に関する豆知識をWORD WATCHのコーナーに配置しています。語彙力は英文理解の鍵となるもので、その力を付けるにはまず、意味はわかるが適切に使うことができない受容語彙を増やすことが重要です。しかし、丸暗記で一時的に語彙を覚えても、記憶に留めることは大変難しく、生徒が何らかの「気づき」を持つことが効果的ではないでしょうか。WORD WATCHのコーナーでは、語源や日本語化したカタカナ語との意味の違いなどの簡単な解説を載せました。語彙への「気づき」と関心を高めてもらうことを期待しています。

5) アクティブ・ラーニングを取り入れる

教師による一方的な説明や解説ではなく、生徒たちの能動的な学習への参加を促すアクティブ・ラーニングは、生徒にどう学ばせるかを教師が工夫することによって可能となります。もちろん、アクティブ・ラーニングとして展開しやすい活動と、そうでない活動がありますが、『VISTA II』には、展開しやすいものも多くあります。たとえば、Lesson 6 Becoming the Bestではプロテニスプレイヤーの錦織選手へのインタビューを題材としていますが、それを参考にして、生徒がグループで近隣の高校や大学で活躍する外国人スポーツ選手に英語でインタビューして発表したり、関係代名詞の非制限用法を学ぶLesson 9では、外国人観光客に訪れて欲しい地域の名所のスライドを作成して、それに英語の説明を考えて音声を録音し、町で活用してもらうなど、実際に自分たちの英語の学びを社会につなげる機会を作ることでもできるでしょう。

英語でのアクティブ・ラーニングは、生徒が説明を聞くだけで授業が終わるのではなく、課題を見つける、分析する、提案する、それを実践する、成果を評価する、などのプロセスに自主的に参加し、問題解決のために自分の持てる知識を使って、友達と協力して目標を達成することを通して、英語のスキルを磨くことを目指しています。もちろん、これらのプロセスの一部だけでも繰り返し行うことで、生徒それぞれが英語のコミュニケーション力に少しずつ自信を持ち、自ら発信することを楽しく思うようになるための大きなステップとなることでしょう。

4. おわりに

2021年度には中学校の学習指導要領改訂が全面実施され、翌2022年度からは高等学校外国語（英語）の学習指導要領改訂も学年進行で実施されることとなります。その骨子は、小・中・高を通して、一貫した学習到達目標を設定することで、英語によるコミュニケーション能力、特に英語で情報や考えなどを表現して伝え合う発信力を養い、自己肯定感を持つ若者を育成することにあります。そのための一つの方策として、中学校から授業は英語で行うことを基本とすることとなります。『VISTA』で学ぶ生徒にも、日本語を交えてでも、少しずつ英語での指導に慣れ、伝え合うコミュニケーションの楽しさを知って欲しいと思います。

「文部科学省教育課程企画特別部会における論点整理について（報告）」（平成27年8月）では、外国語で育成すべき資質・能力の「三つの柱」として、①何を知っているか、何ができるか、②知っていること・できることをどう使うか、③どのように社会・世界と関わり、より良い人生を送るか、を挙げています。この考え方は、すでに多くの国で活用されている指標であるCEFR（「外国語の学習・教授・評価のためのヨーロッパ共通参照枠」）を参考にしたものです。これからの英語教育は、何を教えるかだけでなく、どのように学び、どのような力が身についたか、を常に問いかけながら進めていくことになるでしょう。

生徒たちが英語学習に興味をもち、成功体験を重ねて、「自分にもできる」という自信をもって英語に取り組んでくれるような授業運営をしたいものです。そのためにも、生徒の英語力のレベルに応じて、先生方が様々に味付けをしていただける教科書として、『VISTA』をご活用いただければ嬉しく思います。

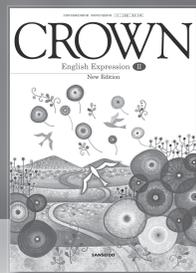
【VISTA編集部より】

 VISTA English Communication I New EditionのLESSON 9で扱っている絵本作家のディック・ブルーナさんが、2017年2月にお亡くなりになりました。教科書印刷時にはご存命だったため、教科書本文ではその設定になっています。ご指導の際にはその点をご配慮いただきたく、お願い申し上げます。ご冥福をお祈りするとともに、これからもVISTAを通して多くの高校生にディック・ブルーナさんの功績について読んでいただけることを願っています。

『CROWN English Expression II New Edition』

Active Learning を活用して

—「ことばへの気づき」を表現力養成の起爆剤に—



元電気通信大学 松原 好次

1. はじめに

「能動的な学び」の必要性が叫ばれている昨今、英語で表現することを後押しできる教科書はどのようなものだろうか——。学習者は「表現しなさい」と強制されても、教師の期待どおり話したり書いたりはしてくれない。自ら進んで表現してみたいという気にさせるには、どのような教科書が必要だろうか——。こうした問題意識をもって、CROWN English Expression II New Edition (以後、『クラウン英語表現Ⅱ改訂版』)の編集作業にあたりました。すると時間の経過とともに、Language Awareness (LA: ことばへの気づき)とCritical Language Awareness (CLA: 批判的言語認識)という概念が一つの切り口として浮上してきました。LAとCLAを手がかりとした試行錯誤の結果、『クラウン英語表現Ⅱ改訂版』の編集作業が終了しました。本稿では、改訂の基本方針、主な変更点、改訂版の活用方法について述べたいと思います。

2. 改訂の基本方針

改訂版の編集にあたって、以下の3点を基本方針としました。

(1) 「ことばへの気づき」を促す文法項目の提示

重要な文法項目の一つ一つを「ペア文による対比」で提示し、含意の微妙な差異に学習者が気づく手助けをする。そして、そこで得られた「ことばへの気づき」を外国語による表現活動の起点とする。

(2) 表現活動の「流れ」の可視化

Paragraph, Essay, Speech, Presentation, Discussion, Debateについて、各々に特徴的な構造を学習者に明示し、英語による表現の後押しをする。

(3) 「批判的言語認識」を促す題材の精選

言語(外国語としての英語)を学ぶ過程で、自分自

身や他者・社会を客観的に見つめ直す契機となるよう、高校生の知的好奇心を掻き立てる題材を選定する。そして、言語は社会の姿を写す鏡であると同時に、その使用が他者や社会に影響を及ぼすという点に気づくよう手助けをする。

3. 主な変更点

1) 「改訂の基本方針(1)」に則り、以下の変更を加えました。

『クラウン英語表現Ⅰ改訂版』は、文法の重要項目を10のレッスンで詳細に扱いました。具体的には、時制、助動詞、受動態、不定詞、動名詞、分詞、比較、関係詞、仮定法、接続詞です。今回『Ⅱ』の改訂にあたり、**Part 1 (文法編)**では上記重要項目の復習を4レッスン、その他の文法項目(疑問詞、否定、特殊構文、名詞・冠詞、代名詞、形容詞・副詞)を6レッスンで扱い、学習すべき文法項目をほぼ網羅してあります。

その際、「ペア文による対比」という手法を用い、学習者が文法項目のエッセンスを把握しやすいように分かりやすく提示しました。例えばLesson 8 (名詞・冠詞)では、可算名詞と不可算名詞の用法を説明するにあたって、以下の例文を並置しています。

a) There are three **chickens** in the backyard.

(生き物の「ニワトリ」は可算名詞㊦)

b) There are three pieces of **chicken** in my lunch box.

(切り身の「鶏肉」は不可算名詞㊧)

このような提示により、名詞の㊦と㊧の区別を学ぶことによって、学習者は自らの母語との比較を迫られます。そして、英語で表現する際、この「気づき」が活かされることになると考えられます。ちなみに、日本語を学ぶ留学生は助詞の使い分け(「が」と「は」や「へ」と「に」など)に苦労するようですが、それぞれの違いを知ることによって、表現力が格段と付いてくるということです。母語以外の言語学習に

とって、「ことばへの気づき」が表現力養成の第一歩になると言えるでしょう。

2) 「改訂の基本方針 (2)」に則り、以下の変更を加えました。

Part 2 (機能表現編) は、ほぼ旧版を踏襲していますが、例証、比較・対照、譲歩のレッスンを加えるとともに、「パラグラフ・ライティングに向けて」を2レッスンおきに配置しました。ここには、パラグラフの構成(例示・追加、順序・列挙・分類、比較・対照、原因・結果)を3色で分かりやすく示したうえ、モデル文に即した形で「情報をスムーズに引き継ぐコツ」というコラムを新設しました。例えば、「鳥島のアホウドリ」を扱ったモデル文の場合、以下の「コツ」がコラムとして記されています。

- 直前に出た名詞を代名詞で旧情報として受けると、読み手や聞き手は文中の他の語句に注意を集中することができます。[例: scientists → they]
- 同一語句の繰り返しを避け、別の表現で言い換えると、内容が重層的に伝わります。
[例: albatrosses → wild birds]
- パラグラフの構成・内容に適した表現を使うことによって、読み手・聞き手の内容把握を助けることができます。[例: First → Then → Finally (順序)]
見開き左ページのモデル文と「コツ」を活用して、右ページの練習問題に取り組むことにより、パラグラフ・ライティングの要領がつかめるはずです。

Part 3 (スピーキング編)には、SpeechとPresentationをそれぞれ2レッスン、DiscussionとDebateをそれぞれ1レッスン配置しました。その際に留意した点は、各々の表現活動に固有の構造を、学習者に「見える」ように提示することです。例えば、教科書のSpeechやPresentationの原稿の右側余白部に、Introduction / Body / Conclusionのように、流れが一目で分かる傍注をつけてあります。同様に、DiscussionやDebateのレッスンでも、流れが一目瞭然に把握できるように工夫を凝らしました。

可視化された提示を通して、学習者は日本語によるSpeechやPresentationとの相違点に気づくと思われれます。Introductionでトピックの提示や意見の表明を行うSpeechやPresentationが、日本語の場合の起承転結と異なった構造を持つことに気づくはずですが。また、DiscussionやDebateのレッスンで強調した点は、「相手の意見を聞いて正確に理解したうえ

で、その意見に賛成なのか反対なのか、理由を添えて論理的に伝える」ことです。つまり、「単なる意見や主張ではなく、根拠のある主張 (supported claim) による議論 (argument) が最も重要」である点に学習者が気づけるよう提示しました。上記のような「気づき」があって初めて、「英語による表現」の真髄に触れることができるでしょう。

3) 「改訂の基本方針 (3)」に則り、以下の変更を加えました。

「批判的言語認識」のなかの「批判的 (critical)」とは、「他者を非難する」という意味合いではなく、「第三者的立場から客観的に」という含意があります。つまり、「批判的言語認識を促す題材を選定する」という方針は、様々な力関係(考え方や価値観、あるいは地位の不平等性など)を宿したテキストの選定を通し、学習者に「言語と社会」の絡み合いを考えさせる契機としたいということです。

以上の点を踏まえ、Lesson 1に「英語の外来語」を配置しました。英語のなかに定着した借入語をいくつか提示することによって、この言語に内在する歴史や文化の在り方を想像させたいからです。さらに、英語であれ日本語であれ、「純粋な言語」はあり得ないというメッセージも締めくくりの文 (These loanwords show that a language cannot be completely independent in terms of vocabulary.) に込めました。

さらにPart 2・Lesson 8では「英語以外の外国語」を学習する是非についてのテキストを提示しました。英語のみの学習でよいのか、あるいは英語以外の言語の学習が必要かを考えさせるレッスンになっています。“a foreign language other than English”というキーフレーズに内在する「英語の優位性」に気づくことが「批判的言語認識」につながる第一歩になると考えるからです。賛成・反対のいずれを選ぶかは生徒一人ひとりの判断に委ね、いかに自らの意見の根拠を示すかに重点を置いています。

例に挙げた2つのレッスン以外にも、「ことばへの気づき・批判的言語認識」を意識した題材を投入しています。例えば、「フード・ロス」や「スローフード」を扱ったレッスンでは、食生活についての話題を取り上げています。shelf life (賞味期限) や fast food / slow food という英語の表現から、社会問題について高校生が考えるきっかけになるように工夫



してあります。その他にも、「地雷除去ネズミ」「宇宙エレベーター」「鳥島のアホウドリ」「デジタル認知症」といった科学技術に関わるトピックを取り上げて、学習者のLAやCLAを促すように工夫しました。

4. 改訂版の活用方法

改訂版『クラウン表現Ⅱ』による表現力向上のための活用方法を、具体的に述べたいと思います。

1) Part 1 文法編

『クラウン英語表現Ⅱ改訂版』では、『Ⅰ』で扱った文法の重要項目を復習するという設定にしました。その際、「ペア文(あるいは3文)による対比」で各レッスンの文法項目の要点をThe Basicsとして明示してあります。例えば、仮定法と接続詞の復習を目的としたLesson 4では、以下の3文を載せています。

- a) If it **is** fine tomorrow, we **will** go on a picnic.
- b) If it **were** fine today, we **would** go on a picnic.
- c) If it **had been** fine yesterday, we **would have** gone on a picnic.

直説法(叙実法: 事実を述べる動詞の形)と仮定法(叙想法: 想いを述べる動詞の形)の対比、および仮定法過去と仮定法過去完了の対比を例文で確認しながら、復習するという流れになります。

最後に、英語による自己表現活動につながるTRYというコーナーを設けてあります。[例: If our teachers were all robots, ...]

2) Part 2 機能表現編

Part 2は旧版を踏襲して、各レッスンの機能表現を学んだうえ、手紙、スピーチ、レシピ、道案内、賛成・反対の意見、要約など様々なジャンルに対応したパラグラフを書く練習に当てています。各レッスンの締めくくりとして、大学入試の出題例を参考にしたTRYのコーナーがありますので、生徒は挑戦することができます。この指示文(お薦めの観光地への行き方、日本料理の作り方などに関する80語程度の英文を書きなさい、等)を活用して、「主体的・対話的で深い学び」に繋げることも可能かと思えます。

改訂版の「パラグラフ・ライティングに向けて」は既述のとおりですが、もう一つ別の例を挙げて具体的な活用方法を述べたいと思います。③では、例示・追加の表現を用いたパラグラフの展開法を学びます。まず、例示・追加の表現を確認したのち、「セレンディピティ(serendipity)」についてのテキストを読みます。

この語の定義を主題文で理解してから、A typical example is Another example is という具合に、パラグラフが展開していく様子を学習者は把握することになります。次にCHECK①では、「フェアトレード(fair trade)」に関するテキストを読み、空所補充の問題に取り組みます。その際、主題文のmain ideaがfor example→in addition→moreoverと展開していくことを学びます。そして最後にCHECK②で、「漫画」に関するパラグラフを完成する表現活動に入ります。

3) Part 3 スピーキング編

このパートでは、Speech, Presentation, Discussion, Debateについて、各々に特徴的な構成を把握したのち、生徒一人ひとりが自ら原稿を作成し実践することになります。その際、Useful ExpressionsやQuestion Cornerに例示された表現を参考にすることによって、無理なく自分の意見をまとめることができるように工夫してあります。趣味や訪れてみたい国についてのスピーチ、あるいは、コンビニなどの24時間営業についてのディスカッションやオンライン教育についてのディベートに生徒一人ひとりが挑戦することによって、自主的・積極的な態度で学習できるものと確信しています。

5. おわりに

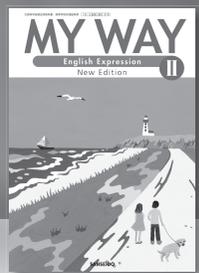
さて、「ことばへの気づき」について考えるとき、糸賀一雄氏の言葉が想起されます。戦後の混乱期、私財を投じて“障害児”のための施設・近江学園を創設した氏は、「この子らに世の光を」でなく、「この子らを世の光に」と述べたのです。そこには単なる助詞の入れ替えではなく、考え方の大転換が表現されていると言えます。

外国語としての英語を学ぶことは、母語の見直しにも繋がるのではないかと。あるいは、言語と文化、言語と社会との絡み合いへの気づきにも繋がるのではないかと。そして、このような気づきが表現意欲を掻き立てる源泉になるのではないかと。こうした考え方を礎として編集された『クラウン英語表現Ⅱ改訂版』をご活用いただけたら幸いです。

なお、新しく全面改訂された『クラウン総合英語(3版)』には、この教科書と同じ例文が採られており、より詳しい解説が施されています。教科書と同様に一読いただけたら幸いです。

『MY WAY English Expression II New Edition』 —教科書を使った Active Learning の方法—

同志社女子大学 飯田 毅



1. はじめに

最近の高等教育及び中等教育を語る際のキーワードとして挙げられるのは、Active Learning (AL) です。ALをここでは、生徒による主体的・能動的・対話的な学び、としましょう。教師は何か特別なことをしてALに取り組むのではなく、日常の授業の中で生徒が主体的・能動的・対話的に取り組む活動を考えることが重要です。普段の授業の中でこそ扱うべき大切な事柄があり、教室の中でしかできないものがある。そこにALの要素を取り入れて行く。本稿では、改訂版『MY WAY 表現II』の特徴をもう一度確認しながら、本教科書を使って、どのようなALが開発できるかを具体的に考えていきます。

2. Active Learning の必要性

ALについて言及されている文献を探すと、必ずと言っていいほど Learning Pyramid が出てきます。これは、アメリカの National Training Laboratories が平均学習定着率を調査し、授業から半年後に内容を記憶しているかどうかを、学習形式によって分類比較し、それをピラミッド形式の図で表現したものです(河合塾編, 2013)。ピラミッドの頂点に位置する「講義」ではわずか5%しか定着せず、次に読書(10%)、視聴覚(20%)、実演(30%)、グループ討議(50%)、自ら体験すること(75%)の順に定着率がよくなり、他人に教えると90%定着するとしています。もちろん、この定着率に対する疑問や批判が多くあることも事実です。しかし、ただ講義や授業を受けただけでは十分に定着しないことは経験的にもわかります。ここで先生方には是非振り返ってほしいことがあります。「英語表現」の通常の授業で、生徒の活動の割合は全体でどの程度でしょうか。ひょっとして、教室では先生の文法の説明と生徒が練習問題を解くこと

が中心になっていないでしょうか。もちろん、授業の中で教師の説明や生徒が問題を解くことは重要な活動です。しかし、生徒は本当に主体的・能動的・対話的に学んでいるでしょうか。

3. 改訂のポイントと Active Learning

1) わかり易い文法・構文解説と系統的練習

本改訂版では、生徒が目標となる文法事項の本質を把握できるように、Pointの扱いをできるだけわかりやすく、かつ、端的に説明するように心がけました。例えば、Lesson 1のPoint 1の文法解説は以下のようになります。「現在形は、列車の時刻などの近い未来の決まったスケジュールの内容なども表します。また、時や条件を表す副詞節では、未来のことでも現在形が使われます。」この現在形は「未来を表す現在時制」と言われるものです。確定的な未来の予定や時を表す副詞節の中で現在形が使われる用法です。この説明と例文を通して文法事項が理解できるように配慮しました。

この用法は、『表現I』で扱った「現在形は、現在の習慣や状態、長期にわたる事実などを表します。」の発展です。『表現I』ではできるだけ基本的な文法事項を取り上げ、『表現II』では応用的な事項を取り上げる、という本書の編集方針に沿ったものです。

また、生徒が『表現II』で扱う文法事項にスムーズに入って行けるように、各Lessonの最初に『表現I』で扱った文法事項の復習のための簡単な解説と練習問題が設けられています。生徒は『表現I』で学んだ現在形を復習した上で、『表現II』の目標である「未来を表す現在時制」を学べるように設計してあります。つまり、本書では『表現I』と『表現II』を通して現在時制のほぼ全容を扱うようになっています。

さらに、各Unitに最低1つの Review Exercise を設け、学んだことを再度復習できるように配慮してい



ます。このように本書では、一つの文法事項を『表現Ⅰ』と『表現Ⅱ』を通して学ぶことで英語の仕組みである文法事項をほぼすべて系統的に、段階的に学べるようになっていきます。

『表現Ⅰ』と『表現Ⅱ』の違いの1つとして、『表現Ⅱ』ではUnit 4に「重要構文の学習」を取り上げています。この重要構文についても、Pointの解説は簡潔にわかり易いように配慮しました。例えば、Lesson 15では代名詞の一般的な人を表す用例を「they, you, we, those, who」を主語として用いると、一般的な意見を表す文をつくることができます。」と説明します。ただ、すべての構文をPointで簡潔にまとめることはできません。英語、いやすべての言語に関して言えることですが、構文や語彙に関しては、必ずしも文法事項のように明確に限定できないからです。しかし、本書では生徒の英語表現力を養成するために、よく使われる表現に関してはできるだけ多く取り上げるようにしました。

2) 「言語学者になってみよう」活動

いつの間にか、教室での文法説明は教師の専売特許になってしまいました。教師は文法を説明し、生徒は説明を聞いて練習問題を解く。残念ながら、このような指導法ですと、生徒の主体性や能動性、対話力は十分に発揮できません。もっと生徒の活動をアクティブにさせる方法はないでしょうか。そこで考えたのが、教師の文法解説に代わる活動です。

上記に取り上げたLesson 1のPoint 1の文法事項解説を使って説明しましょう。この活動で大切なことは、事前の予習プリント等で単語等の意味を調べてくるようにさせると同時に、次のような2つの質問を与えます。質問1：なぜ、未来形でなく、現在形は列車の時刻などの近い未来の決まったスケジュールの内容も表せるのか。質問2：なぜ、時や条件を表す副詞節では、未来のことで現在形が使われるのか。授業では、先生が解説するのではなく、4人のグループの中で、それぞれ考えてきたことを7分程度発表し合い、どれが最も説得力のある説明かを主張し合うのです。次に、その説得力ある説明をグループごとに代表者が全体で発表する。教師は解答を与えるのではなく、それぞれの考え方を尊重し、良い点を褒める。

大学の言語学の授業ならこのような質問はあり得

るかもしれませんが、高校の普通の英文法の授業ではこのような質問は絶対にしないでしょう。難しいかもしれませんが、と同時になぜ英語にはそのような規則があるのか、という疑問を生徒は常に心に抱いているのです。従来の授業では、文法規則を覚えることに焦点がありました。しかし、本活動ではそれを一歩越えて、正解が一つとは限らない学問的課題へと導くのです。さまざまな答えがあってもよいでしょう。間違った答えがあっても構いません。そもそも間違いかどうかはわからないからです。生徒は目標となる文法項目を暗記するのではなく、それについて考える中で、自然にその規則を身につけます。ゴールを一歩先におくと、その前の課題をクリアーできるのです。私はこれに似た活動を、実際に高校生に実践したことがあります。生徒はいろいろなアイデアを出し合います。また、グループで話すことで、生徒は多様な考えがあることに気づき、話し合うことに興味を覚えるようになります。

3) 英文の見直しと Active Learning にふさわしい活動

本教科書改訂に際して、教科書の例文や練習問題の英文はもちろんのこと、ALにふさわしい活動における英文の見直しも行いました。生徒にとって難しいような文の語句は書き換え、長い文は短くし、良質な文にしました。

ALにふさわしい活動とは、巻末のCommunication Activity (CA) のことです。また、従来からあるALにふさわしい活動としては、Part 1では各LessonごとのUSE!のコーナー、各UnitごとのProject Work、Part 2のParagraph Writing、Part 3のDiscussion及びDebateです。その活動のねらいは、今まで学習した語彙や文法事項等を活用して、インタビューや情報交換を行い、実際に英文を書き、英語で討論するなどの言語活動を行うことにあります。このような活動の意義について確認しましょう。

本教科書では、従来からLessonごとにUSE!というコーナーがあり、生徒自身が英文を作り、発表するコーナーを設けています。USE!とCAは基本的に自己表現の場です。学んだ文法事項を使って、自分自身で英文を作り、発表する場です。このUSE!とCAの違いは、生徒の発話量とTaskの難易度の違いです。ここで大切な点は、発表して終わるのではなく、

生徒の発話や書いた英文を通して、再度生徒にフィードバックするという事です。実際の言語使用を通して、再度文法規則に気づかせるのです。

Project Workも自己表現の場ですが、USE!とCAとの違いは、目標となる文法事項に縛られないことです。すなわち、ここではあるトピックを基に、4技能をバランスよく身に付ける工夫がされています。また、ペアでやり取りする活動が設けられています。この場でも生徒へのフィードバックは可能ですが、ここでは生徒が思う存分活動できるように誤りの訂正はせず、生徒に自由に表現させることも可能です。

Part 2のParagraph Writingは、単に英語で書くという活動ではありません。生徒の論理性を身につける活動として位置づけることができます。アングロ・サクソンを含む西洋文化には、東洋の文化とは異なり、伝統的に論理性を強調する文化と深く議論する文化が存在します。また、書くことと話すことは生産的な領域 (production) であることから、互いに強く結びついています。書くことは話すことにつながります。論理的に書くことは論理的に話すことにつながるのです。また、英語のparagraphを知ることは、英語の学術的な文章の読解や聴解に役立ちます。英語の学術的な文章は、論理的に書くことが前提とされるからです。その意味で、高校時代にぜひ身につけてほしい技能です。大学に入学する生徒だけを対象としているわけではありません。高校で卒業する生徒にも、日本語でどのような文章を書いたらよいかという気づきを与えてくれます。そして何より大切なことは、英語で書くことは重要な自己表現であり、高度なALに位置づけられることです。主体性や能動性、対話を用いない活動では、まとものある論理的なparagraphは書けません。

Part 3のDiscussion、Debateは、ある話題について相手の言ったことに対して即座に反応しなければならないという点で、最もレベルが高い活動です。Paragraph Writingに比べてALの割合が高く見えます。何より予測がきかない相手と実際に議論しますから。と同時に、最も難易度の高い活動に位置づけられるでしょう。当然「私の教室では無理だ」、という声が聞こえてきます。確かに生徒にとってレベルの高い活動でしょう。しかし、完全な文でなくてもよく、英語の単語一つでもよいから発することが大切ではないでしょうか。誤った文でも、日本語が入っ

ても可としましょう。とにかく実施してみることが大切ではないでしょうか。

4) Active Learning 活動の留意点

「言語学者になってみよう」活動は、あくまでも一つの例です。生徒の実態に合わせて、もう少し質問を簡単にすることができます。大切なことは、授業内に定着率が良い生徒の活動をきちんと位置づけ、それを活かすために授業外の学びを考えることです。この学びを進めていくと、教室内の学びと教室外の学びを逆転させる反転授業 (flipped learning) にもつながります。ALにふさわしい活動に関しては、その意義を再確認し、できる範囲の中で実施していただくことです。生徒は、教師には見えない秘めた力を持っています。それをどう引き出すかが教師の力量です。また、事前に生徒に活動の評価を伝えておくことが大切です。中間・期末試験の評価の割合はもちろんのこと、日常の活動の評価方法とその割合をあらかじめ生徒に明示することで、ALに対する生徒の動機付けを高めることができます。また、ALは実施した後必ず振り返り、必要に応じて修正することが大切です。

4. おわりに

本稿では、改訂版『My Way 英語表現Ⅱ』の解説と本書を使ったALの方法について考えてきました。特に、ALが必要とされていない文法解説の場面でもどのようにALの要素を取り入れるか、そして、ALにふさわしい活動の意義を確認し、実際にどのように展開するかを紹介しました。本教科書を使って、生徒が生き生きと活動できることを期待しています。

【引用文献】

河合塾編著(2013)『「深い学び」につながるアクティブラーニング』東信堂



『SELECT English Expression I New Edition』 —更なるユーザーフレンドリーな教科書を目指して— (再掲)

『SELECT 英語表現』 代表著者
成城大学 井上 徹



はじめに

『SELECT English Expression I New Edition』(以下、『セレクト表現』)は、生徒の学習意欲を高めることを目指して編集された「英語表現I」の教科書です。現場の先生方が使いやすい伝統的な内容を土台にして、内容面でもタスク活動面でも楽しみながら英語学習が続けられるようにさまざまな工夫を凝らしています。本教科書の初版(平成26年度版)は、新学習指導要領の採択2年目に刊行されましたが、全国の先生方の信頼を受けて、多くの教育現場でご支持を賜りました。今回の改訂版では、取り扱う題材や掲載する写真を最新の内容にして、さらにユーザーフレンドリーな教科書作りを心がけました。

改訂版の編集方針

『セレクト表現』は、中学校で学んだ基本的な英文法を学び直し、さまざまな活動を通して、英語の表現力と発信力を高めることを目的としています。中学で学んだ英文法を学び直すと言っても、単に同じことを繰り返すのではなく、使用する場面を重視して、一歩進んだコミュニケーションのための英文法を基礎から丁寧に学んでいきます。

本教科書の初版では、学習指導要領で示されている総合的・統一的活動を通じて、英語を「学ぶ」ことと「使う」ことを並行して行い、学んだ英語が役に立つと実感してもらえる教科書作りをしました。この立場は今回の改訂版でも変わりありません。以下では、今回の改訂のポイントを説明します。

改訂のポイント

各レッスンの構成は、本書の最大の特色である、①イラストで視覚的に英文法の基礎を学ぶ**セレクト英文法36**、②学んだ文法項目を確認する「瞬間

チェック」から各課のテーマに沿った問題を解きながら文法項目の定着を図る「Gトレーニング」、そして、学んだ文法項目を使って会話形式で自分のことを発信する「Speak Up!」へと続く**系統的な反復学習**、そして③ポライトネスやコミュニケーションの立場から、場面に合った表現を選ぶ**場面でGo!**になっています。

改訂版では、初版の1レッスン見開き2ページの構成を保持しながら、小さな改訂を積み重ねました。まず、扱う題材に最新のものを取り入れ、写真と英文を新しいものにしました。具体的には、「はやぶさ2の挑戦」(Lesson 11)という最新の内容を取り入れています。また、前見返しと後ろ見返しのトリックアートの絵を新しいものにし、バスケットボール(Lesson 1)、宇宙食(Lesson 2)、錦織圭選手(Lesson 3)、Hello Kittyとアイドルグループ(Lesson 5)など、多くの写真を新しいものにしました。これらの変更に合わせて、**イントロ英会話**の英文や欄外の**なるほどザ☆ワード**の説明を調整しました。さらに、最新的话题を提供するために、練習問題の英文を一部変更しました。

取り扱う文法事項に関しては、初版で巻末の「文法のまとめ」にのみ掲載されていた<as ~ as ... >の同等比較を含む例文を「セレクト英文法36」のプラスαに追加しました。また、「場面でGo!」の問題を一部差し替え、正解が選びやすくなるように配慮しました。

さらに見やすく、わかりやすく、学びやすくするための工夫としては、デザインや活字を一新しました。これまで『セレクト表現』をご使用いただいた先生方には、活字やデザインを新しくしたことで、教科書全体の印象が変わったことを実感していただけるでしょう。

このように、今回の改訂版では『セレクト表現』

をご使用いただく先生方にも生徒のみなさんにもこれまで以上に見やすく、教えやすく、学びやすくするように、微差を積み重ねています。

本教科書の特徴

すでにご紹介したとおり、『セレクト表現』は英文法の基礎・基本を確実に習得しようとする高校生のために編集されたものですが、特に、英語を苦手としている生徒や英語に自信が持てない生徒たちに、これまでつまづいてきた事項や不安な事項を克服できるように編集してあります。そこで、この項では、英語の基礎・基本を学ぶために配慮したこと、『セレクト表現』の特徴をあらためて紹介します。

1) 文法項目をイラストで図解

2単位の教科書であることを考慮して、何百とある英語構文や文法項目の中から、これだけは覚えてほしいという文法事項を36項目精選し、**セレクト英文法36**というタイトルで各レッスンに2つずつ配置しています。それぞれのキーセンテンスには、意味や用法の特徴を視覚的に理解できるようにイラストをつけ、図解しました。英語学習でつまづく原因になっている難しい英文法概念や抽象的な文法用語を避け、イラストを見るだけで楽しみながら基本的な文法項目のイメージを理解できるのが本書の一番の特徴となっています。また、「セレクト英文法36」に関連する文法項目を、**プラスα**としてキーセンテンスごとに1～3項目取り上げています。「セレクト英文法36」にはガイドキャラクターがときどき登場し、語彙や構文の意味や用法を覚えやすいことばで紹介したり、補足説明してくれます。このように、わかりやすいイラストと生徒に語りかけるようなやさしいことばで、表現する際に基礎となる英文法を理解していきます。

2) 豊富な問題でセレクト英文法の定着をサポート

学んだ文法項目を実際に使えるようにするためには、繰り返し学習することが欠かせません。学んだ英語を生徒にすぐに使わせてみるために、「セレクト英文法36」のあとには、**瞬間チェック**という2択または3択問題を配置しています。簡単な練習問題をやってみて、自分にもできるという安心感を得られるようになっています。

「瞬間チェック」に続いて、各レッスンの文法項目とテーマに沿った練習問題**Gトレーニング (Gトレ)**に取り組むことで定着を図ります。『セレクト表現』の各レッスンは、世界の食文化、スポーツ、生き方、芸術、ご当地など、多彩なテーマを取り扱っています。「Gトレ」の問題文はテーマに沿って作られていますので、問題を解きながら、現代社会への関心を高められるようになっています。

また、各課の最後には、学んだ文法項目を利用して、会話形式で自分のことを英語で表現する**Speak Up!**を配置しています。下線部には表現例を示し、そのまま使える語句をまとめた**toolbox**を置いているので、英語の苦手な生徒でも容易にアウトプットできるようになっています。なお、「Gトレ」には4レッスンごとに**Gトレ^{プラス}**を配置し、問題を解きながら、各課で学んだ文法を補強、定着させます。万一学んだ文法項目を忘れていても、傍注としてヒントと関連するレッスンの番号が示されており、すぐに本課に戻って復習できるようになっています。本課で扱った文法項目は、高校生が日常生活でよく使う表現として、巻末に**文法のまとめ**として掲載しています。その英文は、「セレクト英文法」の例文同様に短くて覚えやすいものばかりですので、折にふれてご活用いただけたらと思います。

本課では上記の練習問題のほかに、左ページの冒頭で**イントロ英会話**を配置し、会話の中でターゲットとなる文法項目を使用した表現を導入しています。また、右ページの最初には、写真を見ながら行うリスニング問題**Let's Listen**を置きました。3つの英文のうち必ず一つには「セレクト英文法」で学んだ項目が含まれています。

3) 場面に合った表現を2択問題で学ぶ

「Gトレ」の後には、ネイティブスピーカーが実際に使っている表現を学ぶ**場面でGo!**を用意しました。ここでは、2つの文を見て、ヒントを参考に場面に応じた適切な表現を選びます。その表現は、各レッスンの文法項目に関連しているものになっています。生徒にとって紛らわしい過去形と現在完了形の使い分けを学んだり、日本語を直訳してしまうと誤解を招く表現を学んだりして、自分の気持ちをよりの確に表現するためには、英文法の実践的な知識が欠かせないことを実感していただければと思います。



4) 手を動かして英語の基本を総復習する

教科書の冒頭には、本課への導入をスムーズにするために、英語の基本中の基本を総復習する**Let's Start**を配置しました。最初のコーナーでは、実際に手を動かしてアルファベットの読み書きの復習をします。そのあと、単語のつづりを入れ換えて別の単語に変えるクイズに答えたり、アルファベット順に線で結んでナスカの地上絵を描いたりして、楽しみながらアルファベットの練習を行います。続いて品詞のコーナーでは、英語の単語が文の中で果たす意味や働きによって、いくつかの品詞に分類されることを再学習し、語順のコーナーでは、英語を読んだり書いたりする際に欠かせない英語の語順を、日本語の語順との比較で理解を深めます。

5) 「つなぎ言葉」ふしぎ発見

まとまった量の英文を話したり書いたりするときには欠かせないのが、and、but、becauseなどのつなぎの言葉です。つなぎ言葉には、語と語、句と句、文と文を結びつけ、文章全体にスムーズな流れをつくるという重要な役割があります。**つなぎ言葉ランキング**では、現代英語の中で最も使用頻度の高い「接続詞トップ10」をあげ、わかりやすい例文と直感に訴えるイラストでその機能と用法を紹介しています。ふだんにげなく使っていた「つなぎ言葉」のふしぎを発見して、表現力のアップをねらいます。

6) 総合的な言語活動

『セレクト表現』では、新学習指導要領の趣旨を生かした総合的な活動として、**Speaking Station**と**Daily Conversation**という2つを設けています。

Speaking Stationは、読んだり聞いたりしながらテーマに沿った情報を取り入れ、自分の考えをまとめ、自分の意見を発表するアウトプット活動です。発表に必要な表現をワークシート形式で学びながら、パラグラフ・ライティングと発表の練習をします。身近な発明品、将来就きたい職業、日本文化など、生徒の興味を引くトピックが用意されていますので、楽しみながら取り組めるはずです。

Daily Conversationでは、本課で学んだ文法事項を使って、買い物、レストラン、道案内の場面で多用される基本的な会話表現に慣れ、実際に使えるようになることをねらいとしています。すでに知っ

ている英語の知識をどのように効率よく活用するかを、会話形式で紹介し、それぞれの場面に即した実用的で発信型の表現をまとめています。海外旅行やホームステイの際に役立つ表現集としても、ご利用いただけるはずです。

7) 欄外まで飽きない話題が満載

『セレクト表現』では、欄外に**英語で何という？**となる**ほどザ☆ワード**というミニコーナーを設け、生徒の知的好奇心や社会への関心を高める工夫をしています。

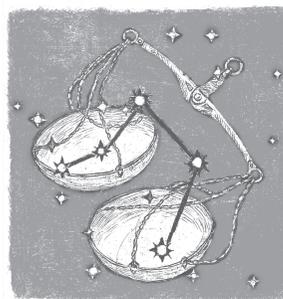
英語で何という？では、各レッスンの文法項目を含む、言えそうで言えない英語表現(日常表現やことわざ)を紹介しています。「セレクト英文法」で学んだ文法項目を使って、こんなこともあんなことも言えるということを実感していただけるでしょう。

なるほどザ☆ワードでは、人気の宇宙食、五輪のマーク、アニメということばのルーツなど、各レッスンのテーマに即した興味深い豆知識を提供しています。

おわりに

以上、『セレクト表現』の編集方針と特色を紹介してきました。文法項目をスムーズに導入し、学んだ項目の理解を深める工夫を随所で行っていることがおわかりいただけたと思います。

冒頭でも述べたとおり、本書は、どの生徒にも学びやすく、先生方にも教えやすいというユーザーフレンドリーな教科書をめざして編集されたものです。本教科書で取り扱っている文法項目の多くは基本的なレベルですが、この一冊を学び終えたときには、以前よりも達成感が得られ、英語を使って積極的に自己表現してみたくなっていることでしょう。本教科書で学んだことが、これからの英語学習を支える大きな力になると信じています。



『SELECT English Conversation』 — 繰り返しが会話力をつける —

(再掲)

『SELECT 英語会話』 代表著者

元拓殖大学 北出 亮



編集方針

「英語会話」の学習指導要領における目標は、「英語を通じて、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育成するとともに、身近な話題について会話する能力を養う」となっており、この「英語会話」の前身である「オール・コミュニケーションⅠ」の学習指導要領の内容と基本的にほとんど変わっておりません。科目名は「オール・コミュニケーションⅠ」から「英語会話」となりましたが、テーマ・題材、言語活動の扱い、文法の扱い、英語での授業は、以前の「オール・コミュニケーションⅠ」と同じ扱いです。したがって、現在発行されている「英語会話」の教科書『SELECT English Conversation (セレクト英語会話)』は、全国の先生方から、長年その使い易さで好評であった前の学習指導要領の『SELECT Oral Communication Ⅰ』の編集方針をそのまま踏襲しています。

現在使用されています『セレクト英語会話』は、今から約20年前に初めて学習指導要領に科目として「オール・コミュニケーション」が登場した、1996年初版の『SELECT Oral Communication A』から始まり、この間、『セレクト』の基本コンセプトとして長年教育現場で大きなご支持を頂いてきた「Key Expression方式」「5段階ステップ方式」「コミュニケーション活動」「ワークシート」などの指導法を、改訂の度ごとに受け継いできました。そしてまた、現在お使い頂いています『セレクト英語会話』も、「授業が進めやすく、教えやすい」「楽しく学べて力がつく」「基本表現を繰り返して段階的に学ぶので、授業がしやすく達成感がある」「教材が充実していて評価がしやすい」という基本的な編集方針に、さらに磨きをかけて編集されています。

先生方から支持された「5段階ステップ方式」

セレクトが全国の先生方に支持されていることの一つの大きな理由は、各レッスンが全て、「5段階ステップ方式」の活動パターンに基づいているという、使いやすさにあります。この方式が、特に英語が苦手な生徒にとってなぜ使いやすいのか、この方式の基本パターンを見てみることにしましょう。

① Key Expressions

まず、このレッスンの基本表現となる、3～5つの会話文が提示されます。この基本会話文が、この課で生徒が覚える「基本表現 (Key Expressions)」となり、この「基本表現」を生徒の記憶に残すために、これ以降のステップ活動の中で、最も効果的な活動を通して繰り返し何回も使っていくことになります。

② Warm-Up

次に、この「基本表現」を使うにあたって、よく使われる語句を確認していきます。音声でその語句を含んだ短い文を聞かせて、その文の中に教科書のイラストと語句で提示されているどの語句が入っているかを、クイズ形式で確認していきます。

③ Listening

次に、①で提示された会話の中に、②で確認しました語句を組み込んで会話が行われます。生徒は、その会話を聞いて、それに該当する項目に○をつけていきます。これは、表形式になっていて、答えも各項目別に選択方式になっていますので、解答しやすく、結果として、何回も「基本表現」を繰り返し聞くことになります。

④ Speaking (Communication)

次に、①の会話文の内容を自分のことに置き換えて、自分の立場で応答する練習をします。その答えを出すにあたっては、②のWarm-Upで確認した語句や、脚注にあるWords & Phrasesにある語句など



も参考にしながら、自分に合った語句を探すとよいでしょう。

⑤ (Interview / Role Play / Pair Work / Presentation) 活動

ここでは、会話の内容によって、その内容にもっとも適した3種類の異なった活動 (Interview, Role Play, Pair Work) が用意されています。

生徒同士で、①の会話文を使って、Interview / Role Play / Pair Workなどの活動を行いながら、その結果を、用意されているワークシートの表に記入しておきます。これも表形式でまとめやすくなっていますので、記入したことを、最後にPresentationのパターンにまとめて発表すれば完成です。

以上、「5段階ステップ方式」によるこれら一連の簡単な活動を通して、何回も同じ「基本表現」を聞いたり話したりすることになりますので、必然的に、会話文そのものを記憶する定着率も高くなります。

* Challenge!!

さらに、時間的に余裕がある場合には、これらの「基本表現」が使われている実際の場面の会話文が用意されていますので、クラスの生徒同士で、お互いにスキットの練習をすることもできます。また、こ

の場面はDVDにも収録されていますので、臨場感を持ってその場面を確認することもできます。

新たな追加項目とその対応

「英語会話」の科目には、前の学習指導要領にはない「海外での生活に必要な基本的な表現を使って、会話する」という項目がありますので、このことによる学習項目が、新しく追加された内容になっています。

海外での生活というと、高校生にとっては「留学」ということがいちばん可能性が高いことと思われれます。そこでこの教科書では、東西高校の生徒として新しく亜紀と拓を登場させ、アメリカへ留学させる「亜紀と拓の留学日記」の物語を作りました。また、「前見返し」は空港の到着ゲートの場面、「後ろ見返し」はお別れパーティの場面として使用しましたので、アメリカ入国からホストファミリーとの生活、学校での勉強、休日の観光、そして帰国のためのお別れパーティまで、留学全体の流れがわかるように工夫致しました。

基本的な会話表現は、イラストで面白く描かれた留學生活の様々な場面の中で、実用的な会話として

【5段階ステップ方式】

① Key Expressions



② Warm-Up



③ Listening



④ Speaking



⑤ (Interview / Role Play / Pair Work / Presentation) 活動



* Challenge!!



使われています。会話の場面は、本文の「亜紀と拓の留学日記」の中で47例、前後の見返しで25例、合計72例の対話文としての会話表現が使われていることとなります。

(1) 「亜紀と拓の留学日記1～4」

留学生活の場面を、大きく

- ① ホストファミリーの家
- ② 食事と手伝い
- ③ アメリカの学校
- ④ 楽しい休日

の4つに分けています。4つの項目はそれぞれ、初対面のあいさつと家の中の案内、食事と手伝い、学校でのランチタイムや休み時間、授業や放課後、さらに市内観光や週末旅行など、具体的な生活場面に分かれています。

物語としては、留学生の亜紀と拓は同じ高校に留学しますが、様々な留学生活を紹介するために、別行動をとり、ホストファミリーも異なって設定されています。

会話の場面や表現は基本的なものを配置してありますが、学習者の生徒に興味を持たせるために、場面には面白い人物や動物を登場させ、時には少しオーバーに描き、楽しくユーモアのあるイラストを心がけました。

なお、留学の際の会話だけでなく、アメリカの文化的な背景や地理的な説明を簡単にまとめた「一口コラム」を場面ごとに準備しましたので、ご活用ください。

(2) 「前見返し」と「後ろ見返し」

「前見返し」と「後ろ見返し」は、ニューヨークの国際空港の到着ゲートと、亜紀と拓のアメリカでのお別れパーティの場面ですが、留学日記の中の一部として連結するストーリー性を取り入れました。

①前見返し

ニューヨークの国際空港の到着ゲートで、亜紀と拓がホストファミリーとあいさつを交わす場面が描かれています。空港では、荷物受け取り所、税関、荷物検査、両替、案内などの場面で接触する人達との会話を配置しました。また興味を持たせるために「前見返し」は、様々な動物（オウム、たこや鴨、カンガルー、蛇、らくだ）や人物（サンタクロース、自由の女神像、カリブの海賊、宇宙人、原始人、飛脚）、

そして物（石の貨幣、サンタのみやげ袋、海賊の宝石）がユーモラスに描かれています。留学の導入部分になりますが、楽しく学ぶことができます。

②後見返し

亜紀と拓が帰国するので、そのお別れパーティ会場での会話場面が描かれています。前見返しと同じように人物（リンカーン、自由の女神像、スーパーマン、サンタクロース、カリブの海賊、宇宙人、原始人、飛脚、忍者）や動物（オウム、猫、犬、リス、ハト、トナカイ、ペンギン、鴨）などがユーモラスに描かれています。ここでの会話は、滞米中の感想や思い出、別れのスピーチ、あいさつなどが準備されています。

(3) スターになって自己紹介

スターの写真ですが、生徒が興味を持つように、若者の夢と希望を実現している人達を基準に選び、現在の時代の中でスポーツ、芸能、政治、映画、作家、デザイナー、宇宙飛行士など世界で活躍している人や過去の人でも社会的活躍した人を中心に掲載しました。生徒と一緒に楽しみながらご活用ください。

終わりに

学習指導要領では、選択必修科目であった「オーラル・コミュニケーションⅠ」から「英語会話」と科目名が変わり、教科書名も『SELECT Oral CommunicationⅠ』から『SELECT English Conversation』に変わりましたが、「使いやすいくて、教えやすく」「生徒が楽しく学べて、積極性が身に付く」「基本表現を繰り返すので、表現が無理なく身に付く」「評価がしやすく、教材が充実」などの基本方針は全く変わっていません。また、学習指導要領の追加項目には「亜紀と拓の留学日記」を新しく加え、「英語会話」のテキストとしてさらに充実度を高めています。ぜひご活用いただければ幸いです。

最後に、この『セレクト英語会話』の教科書に一貫して流れる編集方針は「積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育てる」です。「英語会話」は、文法的、音声上の完璧さを目指すのが目的ではありません。恥ずかしがらずに積極的に話し、発表し、聞くことが最も重要です。英語を話そうとする生徒を励まし、評価し、自信を持たせるご指導を先生方をお願いする次第です。

アクティブラーニングを使わないのはもったいないです

桐蔭学園英語科統括主任 大瀧 登志世
桐蔭学園女子中学英語科主任 野口 茉莉

教師の数だけ AL がある

「来年度から、桐蔭学園ではアクティブラーニング(以下AL)型の授業を導入します」と聞いたとき、疑問と焦燥に包まれた。新人時代は公立高校でコミュニケーションアプローチを気取っていたのを、桐蔭学園へ移って予備校型の受験指導に切り替えて20年以上である。自分の指導方法のようなものはできあがっていた。「今までの指導方法をすべて捨てなければいけないのだろうか?」

ALでは、教授型をやめて生徒を活動させるべし、とのことである。やはり、今までとまったく違ったものとなる。さて、どうしたものか、と悩んだ。それでもAL導入の初年度は、中学1年生と高校1年生のみが対象であり、高3の授業を担当していた私は、予習や添削に追われながら12月まで過ぎていった。そこで、AL推進委員に指名され(新年度に中1・高1になる英数国理社の教師1名ずつが指名された)、あわてて勉強を始めた。すでに担当授業はすべて終わっており、机上の論理である。授業を頭の中で組み立てて、「ここで生徒をグループにして話し合わせよう」などと指導案を書いてみても、実際に何をどう言えば生徒が動くのか、また、生徒が意図と違った方向に進んでしまったときにどう修正すればよいのかまったくわからない。

4月。自分が何をしたいのかもわからないのにAL推進委員、しかも、英語科統括主任まで拝命して、高校1年生を迎え、のたうち回りながらの1年間だった。そこで学んだことは、まず、「教師の数だけALがある」こと。そして、「ALは英語教育ととても相性がよい」ことである。

ここで本校の英語教育の流れやシステムとともにAL導入までをお話したい。教科書・問題集の範囲が各学期に指定されてはいる(年間シラバスで配布)

ものの、定期考査はほぼすべて(一部共通問題を扱っている学年あり)各担当者が一人で作成する。たとえば、理数科の習熟度最上位レッスンの英語Iの100点分の問題はすべて自分で作る。だから、その時々を生徒のニーズに合わせて、自由に教材を選んで授業の中に織り込み、その中から自由に出題できる。隣のクラスとまったく違うことを違う方法で教えていても、生徒が納得してくればそれで問題なしなのだ。そうすると自分の得意分野をさらに得意とする教師が増える。訳読式教授の大家、構造分析の重鎮、小テストの鬼、ひたすら音読させる指導者と、バラエティーに富んだばらばらのスタイルを持った教師が育つ。「要するに入試で点が取れるように鍛えればいいでしょ」ということである。各教師が個人商店として、自主教材を作成し競い合うというシステムができていた。さらにこの競い合いを激化させる、生徒による教師の4段階評価があり、教師は定期的に、「高校英語〇人の中で、△位である」との通知までいただいていた(現在、順位付けは廃止されている)。

そこに、突然、「今年からALを導入します」と言われたのだから、たまらない。今まで何年も(人によっては何十年も)培ってきたノウハウが使えなくなると、恐怖におののいた教師が大多数であった。

さて、暦を現在に戻す。生徒に活動させ試行錯誤し、先輩方の授業を拝見して得た教訓。なかなか4技能をバランスよく教える方法に切り替えられなかったのが、ALをとり入れることで自然とバランスが整っていくこと。さらに、今までに培った力がなければALをしても何も生まれないこと。つまり、今まで個人商店として作り上げてきた授業をコントロールするスキルやマイワールドがあつてこそ魅力的なALができることである。

桐蔭学園英語科のAL指導方針

～楽しくなければ学ばないが楽しいだけでも学ばない～

努力すれば明るい未来が待っていると無邪気に信じて切磋琢磨できた時代は、幸せだったのだと思う。英語学習を入試突破の必須項目として、苦行のように単語熟語を覚えさせることは現在の生徒たちにはむずかしい。テレビ番組をながめても、いかに視聴者を楽しませるかに工夫をこらし、お笑い芸人と呼ばれるタレントが、硬派な番組に出演する。人を楽しませることが、あるいは、生徒の立場でいえば、楽しませてもらうことが当たり前の日常のなか、楽しくない勉強に自然に向かうはずもない。その時代が作るムードのなかで、英語学習に向かわせるには、楽しいと思える教材を提示し、楽しい雰囲気をつくる必要がある。これは、ALだけに限らないが、楽しくなければ学ばない、昔ながらの英文解釈を居丈高に滔々と述べる教師は考え直さなければならない。

しかし、「楽しいだけ、活動だけ」でもまずい。英語の技能を身に着けることはグローバルな社会の要請であり、とくに、「話す力」「聞く力」をつけることが急務である。まずそこに疑問符だ。さらに、「そのためには英語で授業をすべきだから、教師は全員、オールイングリッシュで授業をしなければならない」「先生だって間違いも言うけれども頑張っている姿が大事なんだ」という流れ。ここにも疑問符だ。

4技能をバランスよく鍛えるべきであるということはいよい。しかし、そのために、英語で授業をし、生徒に“Don't be afraid of making mistakes.”と言い続け、大学に入学した時には、「意見を求めるとぺらぺらとよくしゃべるけれども、主語も動詞もなく何を言っているのかわからない」と言われてしまう生徒を育ててしまっているのだろうか。社会からの要請は、間違えた英文を話し、書いて、なんとか相手に聞き取ってもらう、読み取ってもらう力をつけることではないはずだ。

生徒が身に着けるべき英語力とは、相手の意見を正確に聞き（読み）とり、情報を正確に取捨選択し、自分の意見を正確に世界に発信する力である。教師が英語を使うな、とは言わないし、生徒のミスをすべて直せ、と言うつもりもない。しかし、軽佻浮薄なただ英語をしゃべって英語で活動させよという流れは危険であると思う。

また、AL活動というと、ペアワーク・グループワークをすればいいのだ、という誤解がある。逆である。生徒にこれこれの力をつけたい、という熱い思いがあり、そこから、ペアあるいはグループで活動をさせることがその力をつけるのに有効であるから活動をさせるのだ。

誰でも初心者から始まる。だから、教授型の授業しかしたことがないのなら、まず形から入るのは仕方ないことだ。しかし、そこで満足してはいけないと思う。教える生徒がどんなに学力が低くとも、教師は大きな目標を掲げて示してあげるべきだ。「○○大学合格」なんて小さい目標ではない。「△△ができる人間になる」である。「できる」は一生ものだ。成功体験を通して自己肯定感が高まり、さらに上を目指して、自主的に学べる生徒になる。本校のagenda 8にある、「自ら考え判断し行動できる生徒」の創出を目指してAL指導をしている。

◆授業実践例 1

「CROWM English Communication I (三省堂)

Lesson 8 Section 2を使った授業例

(予習はなし)

1. デジタル教科書のフラッシュカードで新出語いをインプット
2. 「英語で授業」の英問英答問題をスクリーンに映し、意味を確認
3. 音声を流して、解答させる〔レベルに応じて、日本語での解答でもよいと指示〕
4. 音読活動（ペアで唱和・シャドウイングなど）
5. 空白部分を埋めながら読む
6. 本文の内容について議論する

* 5について：

目標：日英変換の瞬発力をつける

日本語を英語に変換するのに時間がかかれば、自然な会話なんてできない。瞬発力が必要である。英文を暗記させてインプットの量が飽和するとぺらぺらとしゃべりだす、なんてこともあるのかもしれないが、飽和するのはいつなのだろうか、そんなあてにならない時期を待って努力させるのはつらい。そこで、意図的に瞬発力を鍛えるワークを行う。いろいろな場面を設定して、瞬時に英文を作る活動を英語表現の授業では行っているが、ここでは、英語 I



の教科書を使った活動を紹介する。次のように、英文の中にブランクを作り瞬時英語変換の訓練をする。スライド画面と本文は下のとおりである。

Read with the blanks 1
 “I 見男約 10 歩傍. He was 運赤背. In those days in Japan, we often saw children playing 共小弟+妹背, but this boy was clearly different. I could see that he had come to this place 為深由. He was wearing no shoes. His face was hard. The little head was tipped back 似赤完眠.”

“I saw a boy about 10 years old walking by. He was carrying a baby on his back. In those days in Japan, we often saw children playing with their little brothers or sisters on their backs, but this boy was clearly different. I could see that he had come to this place for a serious reason. He was wearing no shoes. His face was hard. The little head was tipped back as if the baby were fast asleep.

日本語は便利なことに表意文字を持っている。これを使って意味を瞬時に英語に直せる。初めは教師が作った漢字・記号で練習するが、その次の章ではグループで考えさせる。すると英文・語句・前置詞の深い意味まで考えるようになる。グループで活動するのは、より良いアイデアを共有できるからである。コツをつかめたと判断したら、次の章は個人で漢字記号を考えてすらすら言えるところまで宿題とする。ALは宿題をどうするかが課題となることが多いが、新出語の意味を辞書で調べ英文の意味をノートに書いてくるという旧来型よりも運用力をつける宿題となる。クラス全員の前で発表する前にペアで確認する時間もとる。まじめでシャイな生徒集団の場合には、友人に一度聞いてもらうという段階を作ると発表時に大きな声が出る。

* 6について

自分に引きつけて考えられなければ、英語の授業はただの技術の伝達にすぎない。生徒の感性を豊かにし、考えるヒントを提示している教材を放置する手はない。生徒は、グループで意見をまとめ発表する。1分間話し続けるようにとの指示だが、最初はうまくいかない。前に立つ緊張感から、人が聞き取れるスピードなんて無視して小さな声で早口で言うから、考えていたことはあっという間に話し終えて立ち往生する。

しかし、この立ち往生した経験が、「次に発表するときにはうまくやってやるぞ」という学習に向かう良い流れを作る。発表の構成をもっと考えるべきだったとか、語彙をもっと増やさなければいけない、とか、そういうことだ。「英語のテストでよい点数をとるために勉強します」と言ってくれる、ありがたい(?)生徒はもう少ない。『必要は発明の母』ではなく、『必要は学習の母』であると思う。

以下が、話し合いのテーマである。

Answer the questions with group members.
 What do you think the boy in the photo (p. 115) was thinking?
 If you were the boy, how would you behave in that situation?
 Share your idea with your group members.

◆授業実践例 2

【Crown English Communication I (三省堂)

Lesson 9 Section 2を使った授業例】

(予習はなし)

1. ~ 4. は実践例 1 と同じ
5. リテリングする

目標：英文を読み取り、自分なりの要約文を作り、言えるようになる

英文の要点を述べようとする、あるいは書こうとすると、どうしても最初は1段落ごとのトピックセンテンス(本校では、ALが進んでいる国語科の教師が多く使っている「柱の文」という言葉で表現)を拾って、ただつなげることで終わってしまう。TEAPの要約について西川美香子氏(日本英語検定協会)の講演を聞いたおりに、「コピペ解答は評価されません。」と、宣言され、これは、何らかの対策を打たねばいけないと、セクションごとの要約をさせようとした。ところが、生徒はとまどうばかりだった。柱の文を何とか接続詞や接続副詞を使ってつなげるだけならできるけれども、表現をパラフレーズする力がまだまだであり、あまり成果がないままに終わっていた。英文の要点を一度、日本語のメモにさせてから要約するという形もやってみたが、生徒たちは、要約の日本語を書いてみて、それを英訳しようとする、時間がかかる割には英語ができたという達成感が得られないワークになってしまっていた。そこで、1月からの最終学期に、「リテリングができるようになる」ことを大きな目標に掲げた。

各段落から柱の文を探して下線を引く→その中のどうしても使いたい表現はキーワードとして○で囲む→リテリングするためのメモを作成する→ときどき教科書を見ながらでもよいがあくまでもメモを見てリテリングする練習をする→メモのみを見てリテリングするという段階を踏んだ。

Section 1では、授業中にペアでどうしたらうまくいくか考えさせ、実際にお互いにリテリングをした後で、あくまでも一例として、教師自身がメモを見ながら(生徒も同じメモをスライドで確認しながら)リテリングした。教師は毎回ちょっとずつ表現を変えて、同じメモを見ながらでもいろいろな言い方があることも指摘した。Section 2では、英文の内容を確認したのちにリテリングのメモを、ペアワークで作らせ、リテリングの練習は各自自宅で行うように指示し、翌日発表させた。その日の発表は、印象的な言葉をそのまま拾ってくるものもあれば、抽象化した表現でまとめる生徒もいて、どちらも素晴らしいのだと評価した(ALはほめることが大事)。生徒は発表を聞くと自然と拍手が出てくるので、シャイな生徒の多いクラスでもなんとか前で発表してくれる。ときどきつまることもあり思い出せないフレーズをちょっとと言うなどの補助が少々必要だった。そのとき、指名されて前に出たけれども流ちょうに言えなかったことを残念に思っていた生徒が次の授業ではとても一生懸命に最後の練習に臨んでいて、この時も、失敗することは無駄なことではないと思った。3日目のリテリングは、あまりにすばらしい発表で、生徒たちは天才なんじゃないかと思った。こんなことできるのだろうか?と活動を控えてしまうことがあるが、生徒は「できる」と信じて補助を与えてあげると本当にできるようになるのだと実感できた。そして4日目は文章の説明もせず、自分で読んで意味を考えてリテリングしておいで、と指示した。「えー??」と大きな声で反発しているふりをしていたが顔は笑顔。そして、嫌な活動を回避しようと欠席する生徒もいなかったところを見ると、楽しんでくれていたようだ。やはり、力がつくと実感できる活動ならば生徒はついてくる。

リテリングを作るときやり方を示すために、生徒に見せたスクリーンと、生徒から回収したワークシートは以下の通り。Lesson 8で培った英文の意味を漢字や記号に変換する技術を、強制されたわけ

もないのに使ってくれている生徒もいて、授業で使ったスキルを自分のものとして取り込んでくれたのがうれしい。

Simon Baron-Cohen, a psychologist at Cambridge University, agrees with Carr that the internet distracts us from more important activities.

"I was surprised to find that I send about 18,250 e-mail messages each year (about 50 a day). Each message takes three minutes; that means I spend about 1,000 hours a year on e-mail alone. Was that time well spent?"

"The answer is both yes and no. Yes, I have been able to keep in touch with family and friends and have completed projects with teams, located in cities around the world. But while these are good points about e-mail, there are bad points too...

"We all know that e-mail is addictive. Each time a message arrives, there's a chance it might bring something exciting, new, and special. But maybe one in 100 has something I really want to know. That means that perhaps only 10 out of the 100 e-mails I receive are worth reading.

Too many e-mails interfere with my work and become a distraction. I don't want to spend too much time on e-mail, instead I want to spend more time on more valuable activities.

主眼語

エピソード

教科書本文「いやそりではない」という主旨

Butの後ろの主旨

Retell the contents

Simon Baron-Cohen, a psychologist agree with Carr	コーエン(心理学者)とカールは同意
E-mail is not worth spending time keep in touch family & friends	Eメールは家族や友人と連絡を維持するのに価値がない
can complete projects with those all over the world	世界各地の人と仕事ができる
takes time to read & can't do more valuable things	読むのに時間がかかり、大切なことをできない

Example

Simon Baron-Cohen agrees with Carr and says that he was surprised to find he spends too many hours sending e-mail messages. E-mail is beneficial because ① we can keep in touch with people easily but many messages are not worth spending so much time. He says we should stop to think about e-mails and start to spend more time on more valuable activities.

② we can keep in touch with our family & friends and complete projects with those all over the world. But it takes much time to read or send messages and can't do more valuable things.

Work 2 To retell the section 4, write the key words below.

レトリック カンガ 賛 (イザナ) 可能性 (イコト) 集中力 (カウケン)

↓

根拠 (キコ) 能力 (カノウリ) 断言 (ダンゲン) どう (どう) 知事 (チジ)

↓

インターネット (インターネット) 影響 (イコウ) 自由 (ジユウ) 思考 (シコウ)

↓

我々 (ワガ) 改善 (カイゼン) 我々 (ワガ) 自身 (コトシ) 心 (ココロ) + 監督 (カンゴク) 我々 (ワガ) 自身 (コトシ) 決意 (ケツイ) 力 (チカラ) 決意 (ケツイ) 人 (ヒト)

Section 4のリテリングのための生徒作成メモ

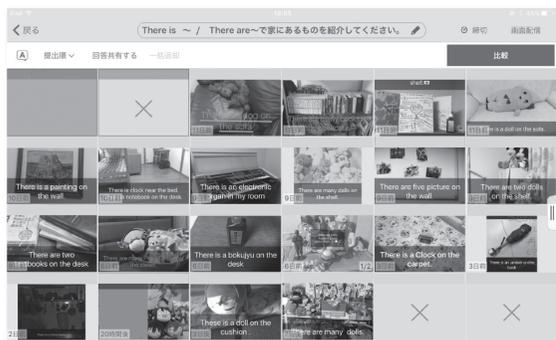
[参考] 2016年7月ELEC 夏期英語教育研修会飯塚秀樹氏(当時自治医科大学看護学部)の実践を参考にさせていただいた。

【文責: 大淵登志世】



授業における ICT 活用

本校では2015年度中学1、2年、中等1、2年の全教室に電子黒板を設置すると共に、中学1年生全員および全教員にiPadを貸与し、授業内外での活用を推進し始めた。学校全体で主に利用しているアプリはClassi、ロイロノートスクール、eトレnetである。以下、iPadやその他アプリケーションを活用した実践例を紹介したいと思う。



『ロイロノートスクール』で写真の共有

①ロイロノートスクール

ホームルームや授業クラスごとに課題の配信や回収ができるグループがつかれ、授業内外で広く活用されている。生徒各自がプレゼンテーションを作成して発表したり、授業内で自分の意見を提出し、他の意見と比較したりすることは様々な教科科目で実施されている。英語科としては他にも長期休暇中の課題として教科書の音読練習を課し、音読する自分の姿を動画に撮影して提出する、ということを中心から2年間実施してきた。

②Dragon Dictation

音声を認識し、文字に起こしてくれるアプリケーションである。授業では全体で音読の練習を繰り返した後、生徒各自がDragon Dictationを起動して音読し、正しく発音できているかを確認するツールとして使っている。上手く認識されない語に関しては辞書アプリ「ウィズダム2」の音声読み上げ機能で発音を確認し、発音を修正するように指導している。

③METRONOME

一般的なメトロノームアプリである。生徒たちは音読の際、語を追うことに精一杯になるあまり、リズムや強弱の無い、単調な読み方になってしまうことが往々にしてある。それを解消するためにメトロ

ノームをかけ、リズムに合わせて強弱をつけながら読む練習をしている。

④Mimic Player

再生速度を調整できる音声再生アプリである。NEW CROWN (中学英語教科書) のUSE Readの英文は新出文法事項こそ登場しないものの文章量も多く、1文1文に注目していると時間もかかり間延びしてしまうので、ディクテーションをしながら内容把握をするようにしている。英文のみの虫食いプリントを配布し、音声を5回聞く間に全ての空所に単語を書き入れるという作業である。音声はそのままと「速い」という意見が多いので、このアプリを使って速度を調整しながら流している(大体0.8倍~0.9倍)。音声を5回聞いた後はディクテーションの答え合わせをしながらどんな内容であったか生徒に尋ねているが、ほとんどの生徒が内容を正確に把握できているようである。似たような活動は高校生でもCROWN English Communicationを使って行っているが、高校生の方はディクテーションではなく、「情報の整理(日本語)」のワークシートを使って穴埋めの形での内容把握としている。1回では理解できない内容が、2回3回と繰り返し聞くうちに、明らかに聴き取れるようになってくるという体験を全員がし、自宅学習でも積極的にリスニングに取り組もうというきっかけになっている。

⑤VCompressor

家庭学習用の教材として英作文プリントを配布し、そのプリントの解説動画をclassiやロイロノートで生徒に配信するのだが、どちらも送信できる容量には限りがあり、動画をかなり細切りに撮影するか、VCompressorのようなアプリを使って解像度を下げ、容量を圧縮する必要がある。

⑥PowerPoint

教員がiPadを持つようになったことにより、従来の新出単語確認や文法説明等の授業の進行はiPadで行うことが増えた。中でも教科書の音読練習の際に、文章をアニメーションで流しながら読むことにより、実際に長文問題を読む時に必要とされる100wpmを意識することができる。以下に手順。

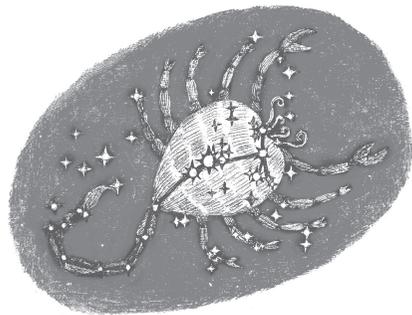
- (1) テキストファイルをスライドに貼る
- (2) アニメーション(スライドイン(下から))をつける
- (3) 「タイミング」で「継続時間」を設定

【文責：野口茉莉】

2017年度 センター試験の 分析と対応

渡辺 聡

東京学芸大学附属特別支援学校



筆記試験

1. 全体的な傾向

今年のセンター試験 [筆記] でもコミュニケーション能力と読解力を試す出題がなされた。設問形式、解答数、配点は昨年度と変わらず、例年通り基本的な問題が多かった。平均点は123.73と、昨年度の112.43より上がり、ここ5年間で最高となった。総語数は昨年度とほぼ同じ約4300であった。

コミュニケーション能力をみる問題としては、

- 第1問A：単語をきちんとした音で発話する能力
- 第1問B：単語を正しいアクセントで発話する能力
- 第2問C：ある発言に対し、適切な応答を考える能力
- 第3問A：対話がスムーズに流れるよう、適切な発話を考える能力

第3問C：発言の内容を要約する能力

が例年通り求められている。

また読解力では、

第3問B：パラグラフ単位で文章の構成を論理的に思考する能力

第4問：グラフや図表、説明文を参考にして文章を正確に読み取る能力

第5問：長文の物語を読み、内容を正確に把握する能力

第6問：論説文の流れを正確に追い、各パラグラフの主旨をつかみながら長文を読み取る能力が試される。いずれも文章の全体的な流れをつかんだ上で、的確な情報を読み取る日頃の学習姿勢が問われる。

2. 具体的内容分析

<第1問>

形式と問題数、配点は昨年度と同じ。

A 発音 (6点：解答数3)

基本的な単語の発音 (母音が1問、子音が2問) を問う問題。スペリングが同じでも発音が異なるものが出題された。

B アクセント (8点：解答数4)

単語のアクセントのある箇所を問う問題。昨年度と同様、今年度も2、3、4音節の語が出題された。例年通り、アクセントのある個所に惑わされやすい語 (marine [問1]、satellite, evidence [問2]、assembly [問3]、democratic [問4]) も複数出題される。

<第2問>

形式と問題数、配点は昨年度と同じ。

A 語彙、語法、文法 (20点：解答数10)

語彙、イディオム、動詞の用法等を判断する問題。時制 ([問5] [問10]) や分詞構文 ([問5]) は頻出である。イディオムやコロケーションの力を併せて要求する問題 (get + O + 過去分詞 [問8]、Nobody ... as ~ as [問9]) も多い。基本的な前置詞や動詞 ([問1] [問3])、関係形容詞や関係代名詞 ([問6] [問7])、不可算名詞や接続語等の幅広い知識も合わせ持っておきたい。

B 語句整序 (12点：問数3、解答数6)

各文の中に含まれる語彙・語法を用い、意味の通る文にする問題。動詞の用法 (find + it + 形容詞 + to ~ [問1]、cost + O + ~ [問2]) は必出である。文法 (仮定法や付帯状況等) も併せて確認しておきたい。

C 応答文完成 (12点：解答数3)

与えられた語句を組み合わせ、対話に即した文にする問題。文法や語法の知識だけでなく、but〔問3〕等の接続語に注意をし、対話の流れを考える運用力も問われる。

<第3問>

形式と問題数、配点は昨年度と同じ。

A 対話文完成 (8点：解答数2)

対話文を完成させる問題。同じ内容を相手が次のせりふで言っていたり (come to your office を before you come で〔問1〕)、But, but〔問2〕等の接続語で相手に対する同意、不同意を読み取る。代名詞 (it〔問1〕) や指示語 that〔問2 選択肢〕の指す内容を読み取る力も求められる。会話でよく使われる表現にも慣れておきたい。

B 不要文選択 (15点：解答数3)

パラグラフのまとまりをよくするために取り除いた方がよい文を1つ選ぶ問題。第1文や最終文からキーワードを読み取る (proper shoes, the right shoes〔問1〕、transporting goods, transportation〔問2〕、the place where you originally learned it, the same environment〔問3〕)。取り除く文にもキーワードが含まれている場合もあるため、前後の文との関連性に気をつけ、主題から外れない読み方を心がけたい。

C 発言の意図の要約 (18点：解答数3)

2人の発言の要旨、及び議論全体の要旨を選ぶ問題。ある事柄を別の表現で言い換える (This would help local shops and restaurants と Working closer to home would improve their family life を people in our town would benefit from a new workplace here で〔空欄32〕) ことが多い。また、〔空欄34〕では、直前に from our discussion so far とあるので、話し合い全体をまとめる考え方が述べられる。個人の意見と全体の話の進み方の両方を読み取る柔軟な読解力が求められる。

<第4問>

形式と問題数、配点は昨年度と同じ。

A グラフ読み取り問題 (20点：解答数4)

グラフを参考に、展開される論からの確な情報を得る力を問う問題。本文で与えられた情報を順次グラフに当てはめていく。グラフはあくまでも補助的なものであり、説明文を正確に読めるか、が問われる。Therefore, Thus, On the other hand 等、文と

文の関係を示す語(句)で、論理の流れを正確につかみたい。最終段落に続く話題を考えさせる問題〔問4〕も、昨年度に引き続き出題された。

B ウェブサイト読み取り問題 (15点：解答数3)

ウェブサイトから適切な情報を読み取る問題。設問を読み、与えられた条件をもとに、合致する情報がどこにあるのかを探し出していく。問いに関する情報は上から順に出てくるわけではないので、設問の求める情報がある箇所(複数の情報を合わせる場合もある)を的確につかむことが大切である。

<第5問> (30点：解答数5)

形式と問題数、配点は昨年度と同じ。題材は昨年度同様、物語であった。

5W1Hをきちんととらえて筋を追う。登場人物の行動や発言、場面の状況から心情を読みとる。柔軟な思考を持ち、物語で何を一番伝えたいのかを深く読み込んでいく。

<第6問> (36点：問数6、解答数9)

形式と問題数、配点は昨年度と同じ。

各段落の内容を正確に読み取り、内容を問う設問(設問A)、段落の要旨を順に並べる設問(設問B)の2本立て。各段落のポイントをつかみ、話がどのように展開し、主題は何か、という広くかつ深い読解力が求められる。また、ここでも、正解の選択肢は本文で使われていない単語や表現で求められる場合も多いので、基本的な類義語を理解する力も必要である。

3. 昨年度から変化のあった点

- ①第1問Aで、母音1問、子音2問の出題となった(昨年度は母音2問、子音1問)。
- ②第3問Cで、一人の発言をまとめる問題から、複数者の発言内容をまとめる問題になった。また、最後の問いでは、全体を通して議論された内容を選ぶ問題になった。
- ③第4問Aで、グラフが1つになった(昨年度は2つ)。
- ④第4問Bで、計算する問題がなかった。
- ⑤第5問問3で、下線部の理由を問う設問が出題された。
- ⑥第6問A問2で、下線部の意味を求める問題が、内容に即した具体的な表現を選ぶものでなく、フレーズの意味を類推するものになった(一昨年度の形式と同じ)。

4. 日頃の学習で大切なこと

①多面的に語彙を増やす

ただ単に単語の1つの意味だけを覚えるというのではなく、英語での定義、反意語、同義語、接頭辞・接尾辞、品詞の転換、自動詞・他動詞等、語彙を様々な方法で多面的に増やしたい。語彙に関連性を持たせると、未知の語に遭遇したときにも想像力を働かせてなんとか意味がつかめるようになる。カタカナになっている語の英語と日本語の意味の差異や発音・アクセントに注意して覚えるのも1つの方法であろう。

②語と語のつながり(語法、Collocation)に関心を持つ

ある単語を頭に入れる際、その語がどのような語と一緒に使われることが多いのか、英語としての語と語の自然なつながりに気を配る習慣を身につけておきたい。単独だとイメージしにくかったり、覚えにくいような単語も、自分が理解しやすい組み合わせなら、より効率的に覚えられる。

③英語を聞き、自ら口にする

アクセント・強勢・構文(主語と述語の区切れや省略等)に注意を払って日頃から英語を聞き、音読をする。単語一つひとつの音に注意を払い、そして文全体の内容を理解しながら読み進む。何回も繰り返かえて読み込んでゆけば、なによりも英語の音に対

する興味・関心が増し、同時にリスニングの力もつく。

④場面や内容のイメージをつかむ

会話の応答を考える場合(第2問C、第3問A)、その会話が行われている時、場所、状況等をイメージする力が求められる。また、物語文(第5問)でも、話の流れをつかんだ上で、想像力を働かせて行間を読み取り、何を伝えようとしているのか、踏み込んで読みたい。

⑤わからない語があっても、前後関係からその意味を類推する習慣をつける

センター試験では語彙に関する知識が求められる。とはいえ、意味のわからない語は必ず出てくるものと覚悟しよう。すべての単語の意味がわからなくても主旨は理解できる、と余裕を持って文章を読み進めたい。未知語に出会うとすぐに辞書で意味を調べる読み方をしていると類推力、想像力が身につかなくなってしまう。

⑥論理展開を重視した読解力を養う

どんな読み物でも最後まで通して読み、論の展開がどのようになっているかをパラグラフ中心に考える。接続語を手掛かりに、パラグラフがどのように構成されているか全体の論調を捉え、各パラグラフのキーセンテンスを探し、要旨をまとめる。「木を見て森を見ず」(You cannot see the wood for the trees.)にならない大局的な読み方を心がけたい。



リスニング試験

1. 全体的な傾向

出題形式、解答数、配点は昨年度と同じである。読まれる総語数(1100語強)は昨年度とほぼ同じ。読み上げ速度は昨年度とほぼ同じで自然な感じであるが、音声面でのリダクションもあり、聞き取りにくい箇所もあったと思われる。問題音声も設問ごとに2回流された。平均点は28.11と、過去5年間で一番低かった(昨年度30.81、一昨年度35.39)。内容はいずれも生徒の日常生活や学校生活の中で起きうる身近な話題がテーマになっている。

2. 具体的内容分析

<第1問>対話ビジュアル(12点;解答数6)

♣男女の対話を聞き、適切なイラスト、数字、単語、文を選択する

♣各対話の総語数:30語前後

イラストを選ぶ問題は2問になり、イラスト内の位置を問う問題はなくなった。数値を聞き取って簡単な計算をする問題は昨年度と同じ2問である。最初のせりふで状況をつかみ、2番目~4番目のせりふのキーワードを聞き逃さないようにする。could've been ~ [問4]、a third of ~ [問5]等、聞き取りにくい語句も含まれ、細部まで集中して聞く必要がある。I don't mind that. [問1]、And the rest? [問2]、fill in for ~ [問3]等、日常会話でよく使われるフレーズにも慣れておきたい。

<第2問>対話応答補充(14点;解答数7)

♣男女の対話を聞き、最後の発言に対する相手の応答を選択する

♣各対話の語数:約20語~30語

問10

Man : Oh! What a surprise! It's so good to see you. How have you been?

Woman : Ah, hello...

Man : Don't you remember me? I'm Joe, from Chicago.

選択肢

- ① Haven't you seen him before?
 ② How did you forget about me?
 ③ I think you may be mistaken. (正解)

④ You have the wrong number.

疑問文で終わる対話の設問は2問あった(昨年度はなし)。最初の2つのせりふから、会話の場面や状況を想像できるようにしたい。ここでも、Let me think., What about ~? [問11]、How can I help you with that? [問12]等、日常会話でよく使われるフレーズが頻出する。

<第3問A>対話内容Qs & As(6点;解答数3)

♣男女の対話を聞き、その内容についての問いを読み、答えを選択する

♣各対話の総語数:約50語

問16

Woman : Hello?

Man : Hi, Jennie. I've got the milk and yogurt in my shopping cart. What else do we need?

Woman : Hang on. Let me look in the kitchen.

Man : OK.

Woman : Um... Will you get some carrots? And make sure they're organic.

Man : Organic? Aren't they more expensive?

Woman : A little bit, but it's worth it.

質問 : Where is each person now?

選択肢

- ① At a health food store and at a supermarket.
 ② At a health food store and at an organic farm.
 ③ At home and at a supermarket. (正解)
 ④ At home and at an organic restaurant.

質問の答えを対話から探す。せりふの数は6か7。事前に選択肢に目を通し、場面が想像できると余裕ができる。対話を最後まで聞き、状況や流れの変化をきちんととらえる。話者が相手に同意しているのかそうでないのかといった話の流れをつかむ力とともに、話者の意図を正確に把握する力も求められる。

<第3問B>対話長文内容Qs & As + ビジュアル(6点;解答数3)

♣長めの対話を聞き、その内容についての問いを読み、答えを選択する(表の空所を埋める設問はなくなった)

♣対話の総語数:約150語

聞き得た情報をもとに質問に答えていく。多く出

てくる情報の中から、何について話しているか、相手はどう反応しているか、指示代名詞が何を指すのか等を考えながら、求められている情報を確実に押さえたい。

<第4問A>

説明文内容 Qs & As (6点; 解答数3)

❖ 説明文を聞き、その内容についての質問を読み、答えを選択する

❖ 説明文の総語数：約200語

1回目と2回目の読み上げの間に約15秒のポーズがある(昨年度は35秒)。情報が出揃った段階で各問の答えを絞り、2回目は確認の作業に当てたい。質問文から事前に推測した状況をもとに、出てきた情報を一つ一つ積み重ねてゆき、話の流れに沿って順に問題に当たってゆく。話の流れが変わったり、固有名詞も出てくる場合もあるので、メモを取りながら、質問されるポイントの個所を絞って聞くことも大切である。選択肢では答えとなる語を別の表現で言い換えたり(performing over three million eye operationsをcarried out several million eye surgeriesに)、まとめる場合も多いので、要点をつかむ力も求められる。

<第4問B> 会話長文内容 Qs & As (6点; 解答数3)

❖ 3人の会話を聞き、その内容についての質問を読み、答えを選択する。

❖ 会話文の語数：約300語

問題冊子に書かれている会話の場面と質問文に目を通し、事前にどれだけの状況を想定できるかがポイント。あとは一人ひとりの主張する内容を総合的に理解する力(共通点や相違点)と、求められた情報を正確に取り出す力が必要である。ここでも、選択肢では答えとなる箇所が別の表現で言い換えられていることがある。

3. 対応のポイント

① 状況・場面を想像し、話の流れをつかむ

事前に問題指示文、選択肢、イラスト、状況説明文等に目を通し、内容を予測してから英語を聞く。複数の方法が提示され、途中で展開が変わり、最初に出てきた情報が最後まで同じとは限らない。方向性を予測した上で、最後まで丁寧に流れを確認したい。

② 英語特有の表現に慣れる

話の展開がつかめれば自然に聞くことができるが、

会話に特有のフレーズは、聞けるだけではなく、意味が自然に頭に入るまで聞き慣れておくようにしておきたい。

③ 言い換えの表現を読み取る

リスニングと言っても選択肢を読み取る力は筆記試験同様に要求される。聞き取る英語の表現がそのまま選択肢に入っているとは限らず、別の形で言い換えてある場合も多くある。正答の鍵となる情報をきちんと整理する力もつけておきたい。

4. 日頃の学習で大切なこと

① 英語の音を聞き、その音を口にする活動を習慣にする

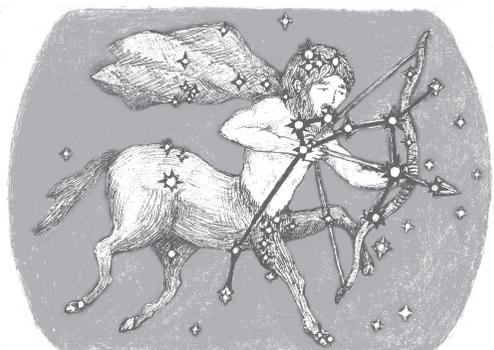
「継続は力なり」と言われるように、1日5分間でも英語を聞き続けることが大切である。様々なメディアを使って英語の音やリズムを継続的に耳に入れておくことを習慣とし、その音を真似して口に出す活動を続ける。次第に英文の流れが、意味を伴った内容となって頭に残ることになるであろう。

② 聞いた内容を論理的に組み立て、考える力を育てる

リスニング力をつけるには、聞いた音を頭の中で論理的に組み立て直す作業が必要である。教科書等の、ある程度分量がある文章の内容を理解した上で英語を聞いて論の展開をつかむ。そして音読、Qs & As、dictation等の基本練習を日頃から行い、論理的思考力も養っておきたい。

③ 自分のことばで実際に表現する機会を増やす

コミュニケーションを成立させるためには、お互いの考えをきちんと伝え合うことが必要である。相手の伝えたいことを理解し、それに対して自分の意見や考えを、決まりきったパターンではなく、自分のことばで実際に表現する活動を増やしていきたい。



現代英語・語法に強い、学習英和・和英の新本命!

コーパスを全面活用し、
「生きた英語」を精緻に分析

ウィズダム 英和辞典 第3版

井上永幸・赤野一郎 [編]

B6判 2,240頁 〈2色刷〉
3,400円

●収録項目数 102,000



自然な英文を書くために、
総合的英語発信を全面サポート

ウィズダム 和英辞典 第2版

小西友七 [監修]・岸野英治 [編]

B6判 2,112頁 〈2色刷〉
3,400円

●収録項目数 90,000



入試に強い、入門から使える、学習英和・和英のロングセラー

グランドセンチュリー 英和辞典 第4版

宮井捷二・P.E.Davenport・
三省堂編修所 [編]

B6変型判 2,048頁 〈2色刷〉
3,000円

●類書中最大の英和76,000/和英20,000
●動詞文型SVOCロゴで詳細に表示



グランドセンチュリー 和英辞典 第3版 新装版

小西友七 [監修] 岸野英治 [編]

B6変型判 1,760頁 〈2色刷〉
2,900円

●平易で覚えやすく自然な用例
●英文作成に役立つ「ライティングのヒント」欄



英語の基礎をしっかりと定着、高校・中学の採用推薦No.1

エースクラウン 英和辞典 第2版

投野由紀夫 [編]

B6変型判 1,904頁 〈2色刷〉
2,700円

●総収録項目数
英和51,000/和英23,000
●コーパスを駆使して最重要語を徹底解説



初学者にやさしい、カナ付き学習英和のスタンダード

ビーコン 英和辞典 第3版

宮井捷二 [監修]・三省堂編修所 [編]

B6変型判 1,696頁 〈2色刷〉
2,700円

【小型版】A6変型判 2,300円

●総項目数60,000 ●総用例数30,000
●総コラム数2,700



三省堂 高校英語教育 2017年 夏号

- 発行 ————— 2017年6月15日
- 編集・発行人 ——— 北口克彦
- 発行所 ————— 株式会社 三省堂
〒101-8371 東京都千代田区三崎町 2-22-14
電話 03(3230)9411(編集)・9412(営業)
- イラスト ————— 只見 優佳 (ただみ ゆか)
- 表紙デザイン ——— 株式会社キャデック
- 印刷 ————— 三省堂印刷株式会社
〒192-0032 東京都八王子市石川町 2951-9 電話 042(645)6111(代)

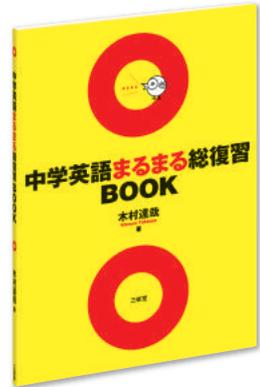
★三省堂教科書・教材サイト
<http://tb.sanseido.co.jp>



中学英語 まるまる総復習 BOOK

木村達哉 著

B5判 136ページ 1,000円



- **単語編** 中学英語のうち重要単語300語を厳選しました。1ユニット60語からなり、全5ユニットで重要単語の定着を図ります。
- **文法編** 中学英語の文法事項を項目ごとに復習します。各文法事項を4技能(読む・聞く・書く・話す)でバランスよく学習できます。
- **長文編** 全4ユニットからなる仕上げの長文読解のパートで、学習後に同じ英文を再度読む「TRY AGAIN」でしっかりと確認ができます。

- ◎ **付属品**
 - ▶ チェックシート(単語編・文法編)
 - ▶ 確認テスト(長文編) ▶ 本文データ

中学英語 まるまるリスニング BOOK

木村達哉 著

「導入編」「練習編」「実践編」の3ステップで丁寧に段階を追って学習をすることで着実にリスニング力がUP!
中学校教科書の文法配列・題材に配慮して英文を作成!



- 基礎** B5判 104ページ 880円
(別冊解答・解説 24ページ)
- 標準** B5判 104ページ 880円
(別冊解答・解説 32ページ)

- ◎ **付属品**
 - ▶ 全スクリプトのテキストデータ
 - ▶ ディクテーションシート (2種類・データ提供)



クラウン

チャンクで英単語

Basic・Standard・Advanced

発信力をアップさせる新世代の英単語帳

2色刷 B6判 赤シート付

東京外国語大学教授 投野由紀夫 編

音声無料ダウンロードあり

- Basic** 高校基礎対応 288ページ 750円
- Standard** センター対応 336ページ 840円
- Advanced** 難関大学対応 408ページ 1,000円



チャンク学習で4技能を
飛躍的にアップ!
発信力を高める2ステップ!
充実の単語情報!



※チャンク：句や節などのかたまり